

整理番号

D-2-3 542

標 題 名

農作物病虫害防除便覧

著 者 名

発行者名

静岡県立農事試験場

発 行 年

大正 10 年 (1921 年)

製作年月

2025 年 7 月

參四號

大正十年三月



農作物病害蟲防除便覽

靜岡縣立農事試驗場



農作物病害蟲防除便覽

はしがき

大正七年十月出版の農作物病害蟲防除便覽を訂正
増補し當業者の參考に資せんが爲め刊行す

大正十年三月

静岡縣立農事試驗場

農作物病害蟲防除便覽

目次

第一 普通農作物ノ病害蟲

一、稻ノ害蟲ト病害

1、害蟲

- 1 稻ニ化螟蟲 2 棲黑橫這 3 姬鳶浮塵子 4 稻螟蛉 5 稻苞蟲 6 稻ノキリウジ
- 7 ユリミハズ

2、病害

- 1 稻熱病 2 胡麻葉枯病 3 黃斑性萎縮病 4 稻馬鹿苗病 5 稻白葉枯病

二、麥ノ病害

- 1 麥ノ黑穗病 2 斑葉病 3 麥立枯病 4 小麥赤澁病 5 麥ノ小銹病 6 麥白澁病

三、貯藏穀物ノ害蟲

1 穀象 2 麥蛾 3 一點穀蛾 4 豌豆象蟲

第二 特用作物ノ病害蟲……………一八

一、茶樹ノ害蟲ト病害……………一八

1、害 蟲……………一八

1 茶ノ丸介殼蟲 2 小綠橫這 3 茶ノ大葉捲蟲 4 苦瓜蟲 5 茶ノ赤壁蟲 6 茶ノ
銹壁蟲

2、病 害……………二二

1 點々星病 2 茶ノ餅病 3 茶ノ炭疽病 4 茶ノ赤葉枯病 5 茶ノ白紋羽病 6 茶
ノ網燒病

二、桑樹ノ害蟲ト病害……………二六

1、害 蟲……………二六

1 桑介殼蟲 2 桑ノ螟蛾 3 桑枝尺蠖蟲 4 金帖蠟 5 桑姬象鼻蟲 6 桑天牛

2、病 害……………三〇

1 桑紫紋羽病 2 桑萎縮病 3 桑胴枯病

第三 園藝作物ノ病害蟲……………三三

一、柑橘ノ害虫ト病害……………三三

イ、害 蟲……………三三

- 1 いせりや介殼蟲 2 龜甲介殼蟲 3 るび蠟蟲 4 あかまる介殼蟲 5 丸介殼蟲
- 6 蜜柑ノ長介殼蟲 7 こんま介殼蟲 8 蜜柑ノ粉介殼蟲 9 蜜柑ノ姬粉蟲 10 蜜柑ノ蚜蟲
- 11 星天牛 12 赤壁蝨 13 蜜柑ノ銹壁蝨

ロ、病 害……………四一

- 1 瘡痂病 2 煤病 3 炭疽病 4 裾腐病 5 潰瘍病

二、梨ノ害蟲ト病害……………四四

イ、害 蟲……………四四

- 1 さんほぜー介殼蟲 2 梨果ノ鋸峰 3 梨蝨 4 梨星粘蝨 5 梨心喰蟲 6 梨姬心喰蟲
- 7 梨ノ葉捲蟲 8 軍配蟲

ロ、病 害……………五〇

- 1 赤星病 2 黒星病

三、桃ノ害蟲ト病害……………五二

イ、害蟲……………五二

1 桃ノ心喰病 2 桃象鼻蟲 3 桃ノ蚜蟲 4 木葉蛾ノ類

ロ、病害……………五四

1 炭疽病 2 縮葉病 3 細菌性穿孔病

四、柿ノ害蟲ト病害……………五六

イ、害蟲……………五六

1 柿ノ蒂蟲 2 柿ノ刺蟲

ロ、病害……………五八

1 黒星病 2 落葉病

五、葡萄ノ害蟲ト病害……………五九

イ、害蟲……………五九

1 ふゐろきせら 2 金龜子 3 葡萄透羽

ロ、病害……………六一

1 黒痘病

六、蔬菜ノ害蟲ト病害

イ、病 蟲

- 1 菜ノ螟蛉 2 夜盜蟲 3 根切蟲 4 瓜守 5 さるはむし 6 黃筋蚤蟲 7 二十八星瓢蟲 8 かふらげち 9 種蠅 10 葱のむくげむし 11 蚜蟲

ロ、病 害

- 1 瓜類ノ露菌病 2 瓜類炭疽病 3 茄立枯病 4 茄子ノ青枯病 5 南瓜ノ白絹病 6 葱ノ露菌病

六七

第四

主ナル殺蟲殺菌劑

七〇

一、驅蟲劑

七〇

- 1 石油乳劑 2 除蟲菊石油乳劑 3 石鹼液 4 除蟲菊石鹼液 5 六液 6 除蟲菊木灰合劑 7 普通石灰硫黃合劑 8 濃厚石灰硫黃合劑 9 販賣石灰硫黃合劑 10 曹達硫黃合劑 11 松脂合劑第一法 12 松脂合劑第二法 13 つのまた液 14 青酸瓦斯燻蒸 15 二硫化炭素燻蒸

二、殺菌劑……………八一

1 石灰ボルドウ液 2 曹達ボルドウ液 3 硫酸銅石鹼液 4 砂糖ボルドウ液 5 フ
 オルマリン液

第五 益 蟲……………八四

べたりあ瓢蟲、べたりあ瓢蟲ノ配付及注意……………八四

第六 野 鼠……………八五

野鼠チブス菌配付規定……………八五

附 録

濃厚石灰硫黄合劑稀釋倍數表

青酸瓦斯燻蒸藥量表

目 次 終

農作物病害蟲防除便覽

第一、普通農作物ノ病害蟲

一、稻ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

名	稱	被害植物	經過	習性	防除	法
稲二化螟	稲、黍、稗等	稲ノ髓ヲ喰害スル普通ノ害蟲ニシテ年二回ノ發生ヲナシ越年セル幼蟲ハ五六月頃蛹化シ次デ羽化シテ苗代ニ飛來シ夜間出デテ稻葉ニ數十粒ノ卵ヲ魚鱗狀ニ群産ス孵化シタル幼蟲ハ稻ノ髓ニ喰入シ多數ノ心枯ヲ生セシメ八九月頃第二回ノ成蟲トナリ稻ノ葉又ハ葉鞘部ニ産卵ス幼蟲ハ一時葉鞘ノ内部ニ喰入シテ葉鞘變色莖ヲ現	苗代及本田ニ於テ捕蛾採卵ヲ行フコト	採集シタル卵塊ハ燒棄セズ必ズ益蟲保護器ニ入レ卵寄生蜂ヲ保護スルヲ可トス	第二回發生ノ葉鞘變色莖ヲ勉メテ早ク切り取ルベシ	稻村ハ蛾ノ發生前ニ處分スルカ又ハ周圍ヲ薙ニテ圍ヒ蛾ノ發生ヲ防グベ

イネノズイ
ムシ

稲二化螟

稲二化螟
イネノズイ
ムシ

つまぐろよこは
棲黒横這

稻、紫雲英、禾本科
等ノ雜草

ハシ後分散シテ髓部ヲ喰害シ多數ノ
白穗ヲ生セシム十月乃至十一月ニ至
リテ幼蟲ハ老熟シテ蠶又ハ刈株中ニ
潛入シタル儘越年ス

綠色中形ノ浮塵子ニシテ年四五回ノ
發生ヲ營ム冬期幼蟲態ニテ紫雲英又
ハ雜草中ニ越年シ五六月頃成蟲トナ
リ苗代ニ集リ苗ノ葉鞘ヲ傷ケ數粒ノ
卵ヲ産ミ込ミ爾後幼蟲成蟲共ニ秋期
ニ至ル迄テ常ニ稻ノ養分ヲ吸收加害
シ特ニ秋期出穗期ニ至レハ穗ノ養液
ヲ吸收スルガ爲メ多數ノ秕ヲ生セシ
メ大ニ收量ヲ減スルコトアリ
本蟲ハ地方ニ依リテ稻ノ萎縮病ヲ
媒介スルコトアリ
電光横這、四點横這、四紋横這、六

シ
螟蛾ノ最成期ニ誘蛾燈點火ヲ行フベ
シ

苗代ニ於テ捕蟲網ヲ以テ成蟲及幼蟲
ヲ掬ヒ取ルベシ

注油驅除ヲ行フヘシ

此場合苗代ニテハ水利ノ便ナル處ナ
レハ苗葉ノ尖端悉ク浸水スル迄水ヲ
張り然ラサル場合ハ一二寸ニ水ヲ張
リ反當一升二三合ノ除蟲菊浸出石油
又ハ二升位ノ石油ヲ水面ニ滴下シ擴
散スルヲ待チテ拂ヒ落スヘシ

本田ニテハ用水ヲ二三寸ニ張り前同
量ノ油ヲ滴下シ竹竿ニテ拂ヒ落シ驅
除スヘシ孕穗後ハ碗様ノモノニテ油
水ヲ稻株ニ灌キテ洗ヒ落スヘシ
陸稻其他水利不便ノ地ニアリテハ石

子^{ひめさびうん}姫^か蔦^{ひめさびうん}浮塵^{うん}

ウンカ、秋
ウンカ、コ
メカムシ

稻

星横這、大横這等アルモ習性經過何
レモ本蟲ニ類似セルヲ以テ畧ス

褐色小形ノ浮塵子ニシテ年四五回ノ
發生ヲ營ミ苗代時期ヨリ刈取りニ至
ル迄テ絶ヘス稻ノ養液ヲ吸收加害ス
ルモ秋期出穂時期ニ至リ遽ニ大發生
ヲナスコトアリ通常秋ウンカト稱シ
農家ノ最モ恐ル、ハ本蟲ナリ概シテ
低濕ニシテ風通シ惡シキ處ヲ好ミ同
一ノ田地中ニテモ内部ノ方ニ多ク又
常ニ稻株ノ下部ニ棲息シテ多ク外面
ニ現ハル、コト無キヲ以テ比較的發
生多キ時ニアリテモ之レヲ豫知スル
コト能ハズシテ遂ニ大被害ヲ及ボス
コト夥ナカラズ

此外本蟲ニ類似セルモノニ「トビイ

油乳劑ノ二三十倍液又ハ除蟲菊加用
石油乳劑ノ五六十倍液ヲ撒布シテ驅
除スヘシ

驅除法ハ前記「ツマクロヨコバイ」ニ
準ス但シ本種ハ常ニ株内ニ棲息スル
ヲ以テ一見其發生ヲ認ムルコト困難
ナレハ豫メ風通シ惡シキ且ツ窒素質
過多ノ田地ハ時々巡視シ其ノ年ノ發
生如何ヲ調査シテ他ノ稻田ヲモ注意
スルコト肝要ナリトス

稲 いね
螟蛉 めいれい

イネアナム
シ、ハムシ、
アチシヤク
トリ、イネ
シヤクトリ

稻

ロウソクカ」「セシロウソクカ」等アルモ
概ネ前者ト共棲シ習性經過モ畧同様
ナリ

小形黄褐色ノ蛾ニシテ幼蟲ハ綠色ヲ
呈シ尺蠖狀ニ歩行ス年三四回ノ發生
ヲナシ四五月頃成蟲羽化シテ苗代ニ
飛來シ葉ニ十數粒ツ、産卵シ孵化シ
タル幼蟲ハ直チニ稻葉ヲ食害シ移植
期頃第二回ノ成蟲羽化産卵シ更ニ本
田ニ移リテ加害ス通常苗代ニアリテ
甚シク食害シ時ニ本田ニ於テハ移植
後直チニ大被害ヲナシ苗ハ中央脈ノ
ミトナルコトアリ秋期ニ至リ老熟セ
ル幼蟲ハ葉及葉鞘ヲ集メテ其内ニ蛹
化越年ス
一種別ニ縦線尺蠖又縞螟蛉又ハ「キ
シヤクトリ」ト稱スル害蟲アリ本蟲

苗代ニアリテハ捕蟲網ヲ以テ成蟲及
幼蟲ヲ捕殺スヘシ
水面ニ反當一升五合内外ノ石油ヲ滴
下シ又ハ米糠ヲ反當三斗位浮ヘ之レ
ニ幼蟲ヲ拂ヒ落シテ驅除スヘシ
苗代ハ水ヲ深ク張り幼蟲ヲ苗ノ上部
ニ追ヒ上ケ後除蟲菊石鹼液ヲ撒布ス
ヘシ

稲苞蟲 いのつむし

一文字セ、
ハマキムシ

稲ノキリ
ウジ

キリウジカ
インボ

稲、竹
笹、ク
サヨシ

稲、
等、麥

ニ似テ苗代時期ニ苗葉ヲ食害ス

年二回ノ發生ヲナシ第一回ノ蝶ハ五
六月頃稻葉ニ點々産卵シ幼蟲ハ七八
月頃盛ニ稻葉ヲ綴リテ食害シ又穂ノ
抽出ヲ妨グ第二回ハ山野ノ竹笹クサ
ヨシ等ヲ食シ幼蟲ノ儘越年ス

年二回ノ發生ヲナシ第一回ハ五月頃
濕地ニ産卵シ苗代時代ニハ此ノ幼蟲
ノ爲メ苗ノ根部ヲ食害セラレ甚シキ
被害ヲ及ボスコトアリ第二回ノ成蟲
ハ八九月頃羽化ス此際ハ稻ヲ害スル
コト無キモ麥ノ幼少ナル際根部又ハ
幼芽ヲ食害スルコトアリ幼蟲態ニテ
越年ス

幼蟲ノ發生ヲ認メタル時ハ可成早ク
葉ヲ開キテ捕殺スヘシ
葉ヲ綴レル際手又ハ藁搔ノ如キモノ
ノニテ梳リ幼蟲及蛹ヲ捕殺スヘシ

苗代ノ水ヲ二寸以上トナシ一晝夜以
上浸水スル時ハ幼蟲ハ畦畔ニ集マル
ヲ以テ此際畦畔ノ内側ニ深キ溝ヲ掘
リ水ヲ溜メ置クトキハ再び侵入スル
コトヲ免ルヘシ
苗代ノ水ヲ排除シ除蟲菊石油乳劑ノ
三十倍液ヲ撒布シ這ヒ出ヅルモノヲ
拾ヒ取ルヘシ
麥畑ニアリテハ除蟲菊石鹼液ヲ撒布
スルトキハ地表ニ現ハル、ヲ以テ拾
ヒ殺スヘシ

ズ
ユリミ、
フリミ、
セ、ナギ

稲苗

赤色小形ノ蚯蚓狀ヲナシ濕地ヲ好ミ
低濕ナル苗代又ハ溝池沼等ニ棲息シ
日中溫暖ナル時ハ地表ニ半身ヲ現ハ
シ水中ニ動搖ス之レカ爲メ根種ヲ漸
次泥中ニ沈降腐敗セシメ苗根部分
ユルメラレ甚シク發育ヲ害ス發生甚
シキ時ハ殆ント發芽セサルコトアリ

整地ノ際馬酔木(アセボ)煎汁(馬酔
木十貫匁ヲ四斗ノ水ニ煎出シ坪二升
ノ割合)ヲ撒布スヘシ
整地ノ際馬酔木生葉坪二百匁又ハ生
乾葉坪百匁ノ割合ニテ細碎シテ鋤込
ムヘシ

上記ノ外稻椿象、黒椿象、クモカメムシ、ハリガメムシ、イナゴ、ヒケナガ、サ、キリ、ケラ
イネムクゲムシ、タテハマキ、ドロムシ、オホズイムシ、アワヨトウムシ等アルモ略ス

口、病 害

病 名 病 狀 病 原 及 ヒ 誘 因 防 除 法

本病ハ發生ノ場所又ハ時期ニヨリテ其名稱
ヲ異ニシ苗ニ發病スルヲ苗いもちト稱シ本
田插秧後過肥ナル場所ニ發病スルヲ肥いも
ち寒冷ナル灌漑水ヲ用ユル場所ニ發病スル
ヲ冷いもちト云ヒ出穂ノ際穂首ヲ犯スモノ

苗代田ノ肥料ハ餘リ窒素質ノモノ、ミチ施
スコトナク必ズ燐酸加里質肥料ヲ加用スル
コト苗代ハ餘リ厚播ニスヘカラズ

稻熱病いもちびやう

ヲ穗首いもち稻稈ノ關節ニ發生スルヲ節黒いもちト稱ス前三者ハ孰レモ葉ニ點々橢圓形ナル綠褐色ノ病斑ヲ生シ此斑紋ハ輪廓判然セスシテ裏面ニハ暗綠色ノ黴ヲ密生ス此病斑ハ次第ニ増加蔓延ス後ノ二者ハ穗首及ビ關節ニ變色部ヲ生シ其上ハ白穗トナリテ枯死ス

本病ハ孰レモダクチラリア、チリツエート稱スル病菌ノ寄生ニヨリテ發病ス

苗代ハ厚播ニシテ過肥ナルモノニ濕潤ナル天候打續クトキ軟弱ナル稻ニ發病ス又本田モ窒素質肥料過多ナル場合ニ發病多シ

本病ハ苗代田ノ末期又ハ本田ノ出穗前後肥料ノ缺乏ヲ感シタル場合稻葉又ハ籾皮ニ胡麻粒大ノ黑褐色橢圓形ノ小斑點ヲ生ズ又移植後ノ苗ニモ發病シ葉ハ遂ニ全體黑褐色黴

苗代ニ發生ヲ認メハ直ニ發病箇所ハ其周圍トモ拔取リテ焼却スヘシ

宅地又ハ市街附近ノ田ハ窒素質ノ肥料ヲ減シ磷酸加里質肥料ヲ加用スヘシ

特ニ寒冷ナル灌漑水ヲ用ユル場合ニハ溝ヲ設ケ流域ヲ延長シテ流入セシムヘシ

本田插秧後發生ノ場合ニハ被害葉ヲ摘ミ採リテ焼却シ一方ニハ用水ヲ排除シテ木灰ヲ施シ蟹爪打チヲナスヘシ

常ニ發病ヲ認ムル苗代田又ハ本田ニ於テハ少シク遲効肥料ヲ用ヒテ肥料ノ缺乏セザル

胡麻葉
枯病

黃斑性
萎縮病

ニテ被ハル、コトアリ此時ニ至レバ全體枯死ス又一穗ノ内二三粒ノ粃ノミ黑褐色ノ黴ニテ被ハル、コトアリ

本病ハヘルミントスポリウム、チリツエート稱スル病菌ノ寄生ニヨリテ此病狀ヲ呈ス多ク肥料ノ缺乏ヲ感シタル際冷温ノ氣候續クトキハ本病ヲ發生ス又種類ニヨリテモ甚シク發病スルコトアリ

本病ハ苗代田ニ於テ苗ノ二三寸ニ生長スル頃ヨリ發病ス初メ心葉餘リ抽出セスシテ前ニ出テタル葉ハ巾廣ク比較的黃綠色ヲ呈ス若シ此苗ヲ移植スルトキハ充分伸長セズシテ分蘖多ク心葉捲縮シテ淡綠色ヲ呈シ遂ニ枯死腐敗スルニ至ル又出穗スルモノアルモ奇形トナル

本病ハスクレロスボラ、マクコスボラ一ト稱スル菌類ノ寄生ニヨリ發病ス

樣注意シ速効肥料ハ數回ニ分施ス可シ成ルヘク耐病性ノ種類ヲ選ヒテ栽培スヘシ

苗代ハ成ルヘク浸水ノ憂ヒナキ處ニ設クヘシ
移植ノ際注意シテ罹病苗ヲ撰リ棄ツベシ
成ルヘク苗代附近ノ稻田ニ於テ萎縮病被害ノ稻ヲ腐敗セシメサル樣注意シ發見次第拔取り稻田以外ニ持出シテ處分スヘシ
メヒツハ、ノビエ、サイトガヤ等ノ雜草ニ

稲馬鹿
いねのはか
なへべやう
苗病

本病ハ苗代田ノ初期ニ於テ葉先マテ浸水スルコトアレハ發病スルモノナリ
前年苗代田近傍ノ本田ニ於テ本病害ニ罹レル稻ヲ腐敗セシムルニ依ル

本病ハ苗代ニ於テ苗ノ三四寸ニ生長スル頃ヨリ特ニ纖弱トナリテ徒長シ明ニ病徵ヲ認ムルコトヲ得移植後モ次第二伸長シ或ルモノハ途中枯死シ殘リタルモノハ穗小ニシテ僅ニ數粒ヲ止ム

本病ハフザリウム、ヘテロスボールム菌ノ寄生ニ依テ起ル病害ナリ

餘リ時期ヲ遅レテ粃種ヲ採リ又ハ餘リ乾燥セシムル等發病ニ關係アルモノ、如シ主ナル誘因ハ浸種ノ際餘リ長ク發芽セシメテ播種スルコトハ發病ニ大ナル關係アリ

本病ハ方言さゝがれ、はがれ、神力ノはか

モ寄生越年スルモノナレバ之等ノ雜草ヲ除
去スヘシ

採種ノ時期ハ餘リ過熟ナラザルモノヲ種子
トナスヘシ

浸種ノ際ハ餘リ長ク發芽セシメザル様ニ注
意シテ播種スヘシ

稲白葉
いねのしろは
がねびやう
枯病

れ等ト稱シ主ニ出穂ノ際劍葉ニ發病ス初メ葉ノ両縁ヨリ縦ニ白色波狀ニ枯込ミ黃色ノ境界線ヲ以テ界シ遂ニハ全體枯死シタル笹葉ノ如キ狀ヲ呈ス故ニさゝがれノ稱アル所以ナリ
本病ハバチルス、ナリツエート稱スル細菌ノ寄生ニヨリテ發生ス
暴風ノ際葉ノ傷ミタル處ヨリ發病スルモノ多シ又種類ニヨリ又ハ軟弱ニ栽培スルモノ多シ

苗ハ成ルヘク強硬ニ作ルヘシ
苗代及本田ノ肥料ニ注意シ窒素肥料ノ過用ヲ避クヘシ
種類ハ成ルヘク發病少ナキモノヲ撰擇スヘシ

此外本縣ノ稻ニハ左ノ數種ノ病害アルモ唯茲ニ病名ヲ掲クルノミ
稻苗腐敗病、萎縮病(ツマクロヨコバイヨリ來ルモノ)縞葉枯病
黑腫病、葉尖稻熱病、早青立病、稻麴病、稻菌核病(數種)等

二、麥ノ病害

病名 病狀 病原及ヒ誘因 一 防 除 法

麥黑穗病ノ種類

1. 裸黑穗病
はだかくろ
びやう
穂病

2. 堅黑穗病
かたくろほ
びやう
穂病

3. 小黒病
こむぎの
くろ
は
穂病

本病ハ大麥裸麥ノ穂ニ發生シ種實ハ黑粉トナリ速カニ飛散シテ後中軸ノミトナルモノナリ

ウスチラゴー、ヌーダト稱スル病菌ノ花粉傳染ニヨリテ起ルモノナリ

本病モ前種ト同シク種實ヲ黑變スレトモ苺取期マデ固ク被膜ニテ包マレ其マ、トナリ居ルモノナリ

本病ハウスチラゴー、ホルデート稱スル黑穗病菌ノ寄生ニヨリ起ルモノナリ

大麥ノ裸黑穗ニ酷似シ小麥ノ種實ノミニ發病スルモノナリ

本病ハウスチラゴー、トリチシート稱スル黑穗病菌ノ寄生ニヨリテ發病ス

黑穗ハ孰レモ左ノ方法ニヨリテ豫防スルヲ要ス

麥ノ種子ハ孰レモ無病ノ麥圃ヨリ採種スベシ
發病ノ恐レアル種子ハ必ス冷水温湯浸法ヲ行フヘシ

冷水温湯浸法ヲ行フニハ初メ麥種子ヲ六、七時間冷水ニ浸シ置キ後取出シテ華氏寒暖計(棒狀ノモノ)ニテ百二十度位ノ温湯ニ前ノ種子ヲ暫時入レテ温メ次ニ正シク百三十度ノ温度ヲ有スル湯ニ五分間浸漬シ取出シテ直チニ多量ノ冷水ヲ注キ後席ニ擴ケテ陰干トナシテ乾燥ス
時期ハ夏期又ハ秋期ニ行フ

4 腥なまぐさくろ黒ほびやう穂病

本病ハ小麥ノ種實ニ發病シ普通ノモノヨリ少シク種實ノ形狀小サク内部ハ悉ク黒粉チ以テ滿サレ是レチ捻壓スレバ一種ノ腥キ臭氣チ發ス

本病ノ病原菌ニ二種アリ一ツチチレチア、レーガ井ス、一ツチチレチア、トリチシ一ト稱ス顯微鏡ノ鏡檢ニヨルニアラサレバ明カニ兩種チ分ツコトチ得ズ

5 程からくろほ黒穂病びやう

本病ハ小麥ノ莖葉ニ發病スル黒穂病ニシテ黒色ノ縱線チ生シ後内ニハ黒粉チ以テ滿サル

ウロシスチス、チツクルタト稱スル黒穂病菌ノ寄生ニヨリテ本病チ起ス

以上ノ黒穂病中一、三ノ二種ハ麥ノ開花期胞子ノ風ニヨリ飛散シテ寄生シ其他ノ三種ハ收穫ノ際種子ニ付着シテ發病ノ因トナル

黒穂ハ比較的早く出穂スル故ニ胞子ノ飛散セザル様注意シテ早く黒穂拔キチ行ヒ直ニ焼却ス可シ

斑病 はんびょう
葉 えふ

別名し
ます
き病

麥 むぎ
枯病 かれびょう
立 たち

本病ハ大麥及裸麥ニ發生スル病害ニシテ葉ノ一尺位ニ伸長シタル頃ヨリ葉ニハ縦ニ淡黃白色ノ條斑チ生シ後褐色トナリ遂ニ黒褐色ノ黴チ生シテ枯死スルニ至ル出穂ノ頃發病セルモノハ穂ハ葉鞘ニ包マレタルマ、枯死ス

本病ハヘルミントスボリウム、ガラミネウムト稱スル病菌ノ寄生ニヨリテ起ル者ナリ本病ハ遅播スレハ發病多キ傾向アリ

本病ハ大、小、裸麥ノ孰レニモ發生スル病害ニシテ早キハ二三月ノ頃ヨリ恰モ寒傷ミヲ受ケタルカ如クナリテ發病シ又ハ出穂ノ頃何トナク水分チ失ヒタルカ如クナリテ白色ニ枯損シ苺取期ニ到レハ孰レモ麥稈ノ根際ハ淡黒色トナリ根ハ殆ント腐敗ス年々麥圃ノ同一ナル場所ニ發生シ被害部チ中心トシテ次第ニ其周圍ニ蔓延ス

發病ノ初期麥圃チ巡視シテ病株チ拔取り處分スヘシ
成ルヘク發病ナキ麥圃ヨリ種子チ取ルヘシ
種子ハ冷水温湯浸法チ行フコト
播種ハ適期ニ行フヘシ

本病ニ罹リタル病株及其周圍ノ株マデ普通苺取期ヨリ少シク早ク根際ヨリ一尺位高ク苺取り根株ハ靜カニ抜き取りテ悉皆燒却スヘシ

こむぎのあか
小麥赤
しよびやう
澁病

本病ハオフィチボールス、クラミニスト稱
スル病菌ノ根部ニ寄生スルニヨリテ起ルモ
ノナリ
前年發病シタル土地ニ栽培スレハ又發病ス
尙ホ根株ニハ病原菌ノ付着スルニヨリ是レ
ヲ埋ムレハ發病ノ因トナル

本病ハ俗ニソブ又ハシブト稱シ二三月頃ヨ
リ小麥ノ葉ニ黄赤色ノ小斑點ヲ現シ其部ハ
膨レテ橙黄赤色ノ粉末ヲ生シ後黑點ヲ現ハ
シ葉ハ枯レテ收穫ニ影響スルニ至ルモノナ
リ
本病ハバクシニア、トリチシナ菌ノ寄生ニ
ヨリテ起ル處ノモノナリ麥ノ莖葉軟弱ニ生
長シタルモノ濕潤ニシテ特ニ温暖ナル氣候
ニ逢遇スレハ發病多シ

本病ハ大麥裸麥ニノミ發生シ本邦ニテハ最

適期ヲ失ハザル様播種スヘシ
肥料ハ餘リ窒素質ノ肥料ノミヲ用井ズシテ
必ス磷酸加里質肥料ヲ加用スヘシ

成ルヘク肥料ノ配合ニ注意シテ栽培スヘシ
適期ニ播種スヘシ
小麥ハ成ルヘク發病少ナキ種類ヲ擇ビテ栽
培スヘシ
之等ノ銹病ノ甚シキ所ニアリテハ何レモ耐
病性品種ヲ攪擇シテ栽培ス可シ

名	稱	被害穀物	經	過	習	性	防	除	法
穀 こく	象 ぞう	米、 麥	濃褐色ノ小甲蟲ニシテ翅鞘ニ四個ノ斑紋アリ成蟲ハ六月頃穀粒ノ内部ニ産卵シ之ヨリ發生セル幼蟲ハ白色蛆狀ニシテ穀粒ノ内部ヲ食害シ後其ノ内ニ蛹化ス年三回ノ發生ヲナシ冬期ハ多ク成蟲態ニテ穀粒内ニ越年スルモ亦幼蟲及蛹ニテ越年スルモノモアリ				穀粒ノ乾燥ヲ充分ニスルコト倉庫内ハ出來得ル限り温度ノ上昇ヲ避ケ勉メテ乾燥清掃スヘシ 俵裝ヲ丁寧ニナシ掛繩ハ強固ナラシムヘシ又保米袋ヲ使用スル時ハ一層有効トス 五六月頃ニ硫化炭素ノ燻蒸ヲ行フハ効果最モ大ナリ		
麥 はく	蛾 が	麥	黄褐色ノ小蛾ニシテ年三回ノ發生ヲナシ成蟲ハ五月下旬刈取りタル麥ノ麥粒ニ産卵シ孵化シタル幼蟲ハ直チニ麥粒中ニ喰入シ收穫物ト共ニ倉庫内ニ入り茲ニ甚シク加害シ第三回目ノ幼蟲ハ老熟シテ其儘麥粒内ニ越年ス				前種ニ準ズヘシ		

いってんこくが
トシムシ
一點黑蛾

米

豌豆象蟲

豌豆

灰色ニシテ前翅ニ一個ノ黑色點ヲ有
スル小蛾ニシテ年一回ノ發生ヲナシ
五六月ノ交羽化産卵シ幼蟲ハ淡黃色
ニシテ絹糸ヲ吐キテ穀粒又ハ倭保米
袋等ヲ綴リ其内ニアリテ食害ス冬期
ハ幼蟲態ニテ倭裝又ハ壁板ノ間隙等
ニ長橢圓形ノ強靱ナル繭ヲ固着シテ
其内ニ越年ス

灰褐色ノ象蟲ニシテ一年一同ノ發生
ヲナシ成蟲態ニテ越年シ五六月頃豌豆
畑ニ集マリ幼莢上ニ點々産卵ス孵
化セル幼蟲ハ直チニ内部ニ食入シテ
内部ヲ食盡シ後粒内ニ蛹化シ早キハ
收穫頃羽化シ倉庫内ノ塵芥中又ハ叢
若ハ倭中或ハ日當リ好キ軒下等ノ間
隙ニ潜伏越年シ發生甚シキ時ニハ種
川ノ種實ヲモ得ラレサルニ至ルヘシ

前種ニ準ズベシ

出來得ル限り收穫ヲ早メ乾燥ヲ充分
ニスヘシ
乾燥セルモノハ收穫後直チニ二硫化
炭素ノ燻蒸ヲ施行スヘシ
食用ニ供スルモノハ熱殺スルヲ可ト
ス

上記ノ外鋸穀盜、大穀盜、角胸穀盜、擬穀盜、穀蛾、米ノ黑蟲、小豆象蟲等アルモ略ス

第二、特用作物ノ病害蟲

一、茶樹ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

名	稱	被害植物	經 過	習 性	防 除	法
茶ノ丸介殼蟲	茶、椿、山茶花、躑躅等	圓形灰褐色ノ介殼チ有シ越年セル雌蟲ハ五月頃體下ニ産卵シ幼蟲ハ六月上旬頃孵化ス主トシテ茶樹ノ枝幹ニ寄生シ特ニ粗皮下ニ侵入スルノ傾キアリ本蟲ノ寄生チ受ケタル茶樹ハ寄生部凹ミテ甚シク樹勢チ衰弱ス	冬期松脂合劑チ撒布スヘシ 六月頃幼蟲孵化當時濃厚石灰硫黃合劑ノ五十倍液チ撒布スヘシ			
綠色細長小形ノ浮塵子ニシテ年五回以上ノ發生チナシ成蟲態ニテ越年シ						

こみどりよこはい
小緑横這
チヤノウン
カ

茶ノ大葉
捲蟲

茶、果
樹、桑
大豆等

茶、柑
橘、梨、
椿等

タルモノハ五月頃第一回ノ産卵ヲナ
シ爾來月ニ約一回位ノ割合ニ發生シ
九月下旬羽化シタル成蟲ハ其儘茶樹
ニテ越冬ス幼蟲成蟲共ニ茶ノ新芽ニ
集リ養液ヲ吸收スルヲ以テ新芽ハ萎
凋黑變ス特ニ二番茶發芽ノ頃繁殖最
モ盛ニシテ之レカ爲メ收穫皆無ニ陷
ルコトアリ

年四回ノ發生ヲナシ越年セル幼蟲ハ
四月中旬羽化シ爾後夏期中三回ノ發
生ヲ營ミ九月中旬羽化セル成蟲ハ茶
葉ニ産卵シ孵化ノ幼蟲ハ茶葉ヲ綴リ
テ其中ニ越年ス幼蟲ハ常ニ葉ヲ綴リ
テ其中ニアリテ食害シ新芽ノ發生セ
ル際ハ好ンテ新葉ヲ綴リテ食害スル
ヲ以テ被害甚シ且ツ被害葉ヲ以テ製
茶スルトキハ色澤香氣ヲ惡變シ大ニ

一番茶摘採後二番茶發芽前ニ於テ除
蟲菊石鹼液又ハ石油乳劑ノ十五倍乃
至二十倍液或ハ除蟲菊加用石油乳劑
ノ二十倍乃至二十五倍液ヲ撒布スヘ
シ

除蟲菊石鹼液ヲ可成強力噴霧器ニテ
撒布スル時ハ幼蟲ハ何レモ糸ヲ引キ
テ下降スルヲ以テ藁簾ヲ以テ株ノ上
ヲ掃キ更ニ株元地面ニ同液ヲ撒布ス
ヘシ
捲葉ヲ外部ヨリ壓シテ内部ノ幼蟲及
蛹ヲ潰殺スヘシ

苦れい瓜し 蟲ひし

茶

品質ヲ害ス

此他別ニ三角葉捲蟲ト稱スル害蟲アリ新芽ヲ三角形ニ捲キテ害ス特ニ二番茶ニ發生多ク收量ヲ減ス

幼蟲ハ淡黃綠色又ハ淡綠色ニシテ苦瓜ノ外皮ニ似タル突起物アルヲ以テ此名アリ年二回發生シ六月下旬第一回ノ成蟲羽化シ茶葉ノ裏面ニ點々産卵シ七月上旬幼蟲孵化シテ茶葉ヲ食害シ九月下旬乃至十月上旬第二回ノ幼蟲出テ、再ヒ茶葉ヲ食害シ十一月中下旬老熟シテ茶株内若クハ地下一寸以内ノ處ニ下リテ結繭シテ越冬ス發生甚シキ時ハ綠葉ヲ殘サス遠方ヨリ見ル時ハ赤變シテ枯損セル狀ヲ呈ス

幼蟲發生ノ際除蟲菊石鹼液ヲ丁寧ニ撒布スルコト

夏季剪定ノ際刈落シタル茶葉ハ其儘放置セス集メテ處分スヘシ

茶ノ赤壁あかだ

茶

茶ノ锈壁さびだ

茶

赤色微小ノ壁蟲ニシテ年數十回ノ發生ヲ營ミ三月下旬頃ヨリ無色半透明ノ卵ヲ葉裏ニ産附シ孵化シタル幼蟲ハ葉裏ニアリテ養液ヲ吸收ス被害ノ葉ハ綠色ヲ失ヒ淡褐ヨリ終ニ褐色ニ變シ新芽ハ黑變萎凋シテ落葉ス特ニ降雨少ナク旱天打チ續キタル時ニ繁殖甚シク激甚ナル被害ヲ及ホスコトアリ毎年一番茶發芽頃特ニ被害多シ

前種ヨリ小形ニシテ楔形ヲ呈シ肉眼ニテハ其形態ヲ認ムルコト困難ナリ多ク茶葉ノ裏面ニ寄生スルモ發生多キ際ニハ表面ニモ寄生ス被害葉ハ赤

一番茶發芽前ニハ濃厚石灰硫黄合劑ノ五十倍液ニ番茶發芽前ニハ同劑ノ八十倍乃至百倍液ヲ蟲體ニ觸ル、様丁寧ニ撒布スヘシ
發芽後ニアリテハ除蟲菊石鹼液又ハ石鹼液ヲ撒布スヘシ
石灰硫黄合劑ハ新芽ニ撒布スル時ハ製茶ノ際品質ヲ損スルヲ以テ發芽前ニ應用シテ決シテ發芽後ニ使用スヘカラス
本蟲ノ驅除ハ一回ニテハ充分ノ効果舉ラサルヲ以テ引續キ二回施行スルナ可トス

驅除ハ前記赤壁蟲ニ準スヘシ

サビダニ

褐色銹色ニ變色シ發芽ハ發生鈍ク終ニ萎凋落葉ス特ニ五六月頃旱天ノ續キタル際發生甚シ

上記ノ他茶枯蟬、茶小刺蟲、茶尺蠖、茶避債蟲、茶鐵砲蟲、青翅羽衣、蚜蟲、小蠹蟲、ツノロウムシ、ルビーロームシ、ウスマルカヒガラムシ等アルモ略ス

口、病 害

病名	病狀病原及ヒ誘因	防除法
てんでんぼし 點々星 びやう 病 別名 白星病	本病ハ茶ノ新芽ノ開展ノ頃葉面ニ微少ナル茶褐色ノ斑點多數ヲ生シ之レカ爲メ葉ハ充分發育セサルノミナラス生長遲鈍トナル此茶芽ヲ摘採シテ製造シタル茶ハ特ニ苦味アルカ故ニ俗ニにガト稱ス故ニ本病ハ收穫ニ影響シ尙製品上ニモ大ニ影響ヲ來スモノナリ	春發芽ノ前後三斗乃至四斗式石灰ボルドワ液ヲ撒布スヘシ 成ルヘク肥培ニ注意スヘシ
ナリ 本病ハ細菌ノ一種ノ寄生ニヨリテ起ルモノ		

茶ノ餅病

瘠薄ナル土地ニ栽培シ肥料不足ノ感アルモノニ多シ又霧多キ地方ニモ多シ發芽ノ際降雨打續ク時ニモ發病多シ

本病ハ茶ノ幼若部ノミチ冒シ殆ド年中寄生スルモノニシテ本縣ニ於テハ時ニ晩夏ノ候多濕ナル場合ニ蔓延最モ多ク臺灣印度等ニテハ四五月頃最盛ニ發生ス

エキソバシテユーム、ベキサンスト稱スル黴菌ガ幼弱ナル葉及新梢ニ寄生刺激シテ極部のニ組織ヲ肥厚彎曲セシム、葉ノ病斑ハ圓形或ハ連結セル不整形ニシテ表面黃綠色乃至綠褐色ニシテ裏面ニハ雪白色ニ病原胞子ヲ生ス、幼梢ニ於テモ肥厚彎曲シテ白色胞子ヲ生シ後被害部ハ何レモ黑褐色ニ枯死乾燥スルニ至ル

本病ハ夏季ヨリ冬期ニ涉リ茶ノ成葉ニ發生

四月上旬並ニ最發生期タル晩夏ノ候豫メボルドー液ヲ撒布ス可シ

日常リ惡キ所或ハ窒素質肥料ヲ多ク施シタル場合及ビ窒刈セル茶園ニハ特ニ發病シ易キヲ以テ特ニ注意ヲ要ス

茶ノ炭
痘病

茶赤葉
枯病

スル最モ普通ナル病害ニシテ被害部ハ不規則大形ナル赤褐色病斑ヲ呈シ表面ニ初期濃褐色後ニ黒褐色ノ小點ヲ無數ニ散生ス病斑ハ後ニハ灰褐色トナリ小點ヨリ微細ナル病原胞子ヲ飛散セシム

病原菌チクレチナスボリウム、テアシ子ンシスト稱ス

本病ハ春期又ハ秋期嫩葉ノ縁邊恰モ水分ヲ失ヒタルカ如ク淡綠色トナリ後茶褐色トナリ此時ニ至レハ病斑ハ波狀ノ輪紋ヲ現ハシテ遂ニ枯稿ス又幼芽幼梢ニ發病スルコトアリ殊ニ秋期ノ嫩葉ニ發病多シ

本病ハコレトリクム、カメリート稱スル

黴菌ノ寄生ニヨリテ發病ス

降雨多キ時又ハ秋期肥過キタル茶園ニ發病多キ傾キアリ

發病ニ先チ夏季二三回ホルドー液ヲ撒布ス可シ
病葉チ早ク摘採焼却ス可シ

常ニ發病多キ茶園ニハ發病前三斗式石灰ホルドー液ヲ撒布スヘシ
秋期發生ノ場所ハ九・十月ノ交石灰ホルドー液ヲ撒布スヘシ
肥料ノ配合ニ注意スヘシ

ちやのしろもん
茶白紋

はびやう
羽病

タチガレ

ちやのあみやけ
茶網焼

本病ハ普通根ノ先端ヨリ犯サル、チ以テ初期ハ恰モ肥料ノ不足チ生シタルガ如キ觀アリ黃色チ呈シ次第ニ衰弱シテ遂ニハ落葉シ枯死スルニ至ル此際根部チ檢スレハ毛根ハ悉ク腐敗シ白色紋羽様ノモノチ附着シ幹ノ下部ニハ黑色細毛狀ノモノチ生ス若シ一株枯死スレハ其周圍ニ蔓延シ次第ニ枯死スルニ至ル縣下至ル處ノ茶園ニ發病シ特ニ低濕ノ地ニ多シ本病ハロゼリニア、ネカトリツクスト稱スル菌類ノ根部ニ寄生スルニヨリテ起ル處ノモノナリ
前植物、山林木又ハ桑等ニ本病ノ寄生シアリタル跡ニ栽植スル時ハ本病ノ寄生ヲ受ク

本病ハ多ク茶ノ古葉ニ發病シ年中發病ス初メ被害部分ハ黃綠色トナリ恰モ表面ハ油ノ浸ミタル力如ク裏面ハ少シク白色網狀ニ隆起ス後褐色トナリテ枯死シ乾燥反卷シテ落

病株ハ掘取リテ處分シ決シテ茶園ニ放置スヘカラス

發病ヲ認メハ根際チ掘起シ石灰其他殺菌劑チ耕土ト能ク混和シ茶ノ根ニ掩ヒ置クコト茶園ノ排水チ良好ナラシムヘシ
餘リ急激ノ發育チナサシムル力如キ栽培チナスヘカラス

病^{びやう}

葉ス

本病ハエキソバシユーム、レチクラタムト稱スル病菌ノ寄生ニヨリテ起ルモノナリ多ク冬期ヨリ早春ニ亘リ暖ニシテ濕氣勝チナル時發病多シ又梨樹其他ノ樹下及ビ日蔭地ニ栽培シアルモノ等ニ多シ

毎年發病地ハ冬期ヨリ早春ニ亘リ一回及ビ夏季摘葉後一二回石灰ボルドー液ヲ撒布スヘシ

以上ハ主モナルモノナレトモ此外尙數種ノ病菌アルヲ認ム今之レヲ舉グレバ次ノ如シ

赤燒病、根朽腐、丸赤星病、白斑病、褐色葉枯病、膏藥病、白苔病、紫紋羽病、やまうげのかみのけ、蘚苔類等アリ

二、桑樹ノ害蟲ト病害

イ、害蟲

名	稱	被害植物	經	過	習	性	防	除	法
桑、茶、桃、梅、梨、苹、樹、杏、									

圓形灰白色ノ介殼ヲ有シ年三回ノ發生チナシ第一回ハ五月第二回ハ七月中下旬第三回ハ九月上旬ニ幼蟲發生シ冬期ハ雌蟲ノ狀態ニテ越年ス主ト

冬期石油乳劑五倍乃至七倍液又ハ濃厚石灰硫黃合劑八倍乃至十倍液或ハ

桑介殼蟲

桃ノ介殼蟲
櫻ノ介殼蟲

桑ノメイ
ガ

クワノスキ
ムシ
クワノハマ
キムシ

李、葡萄、
櫻、柳、
梧桐、
胡桃、
山吹等

桑

シテ枝幹ニ密集シテ寄生シ幼蟲發生當時ハ其體色ニ依リ樹幹ノ表面ニ赤色ヲ呈シ雄蟲ノ蛹化當時ハ其分泌物ノ爲メ恰モ白雪ヲ頂ケルカ如キ觀テ呈ス被害甚シキ時ニハ樹勢衰ヘ芽ノ發育鈍ク細枝ノ枯死スルモノアリ

一年四回ノ發生ヲナシ五六月ノ交成蟲羽化シテ葉裏ニ點々産卵シ孵化シタル幼蟲ハ桑葉ヲ折曲ケ其中ニアリテ葉肉ヲ食害シ爾後七月、八月、九月ノ各中旬頃成蟲現出シ九月下旬孵化シタル幼蟲ハ充分成長セル後莖幹ノ裂目株間又ハ附近ノ雜草垣根等ニ粗繭ヲ營ミ其儘越冬ス被害ノ最モ甚シキハ八月下旬ヨリ九、十月頃ニシテ此當時ノ被害ノ爲メ殆ント青葉ヲ殘サ、ルニ至リ晚秋蠶ニ大影響ヲ及ホ

松脂合劑ヲ撒布スヘシ
被害甚シキモノハ蔓延ニ先チ伐採燒却スヘシ
冬期青酸瓦斯燻蒸ヲ行フヘシ

六月中下旬頃第一回發生ノ幼蟲ヲ極力捕殺スヘシ此際ハ一地方共同一齊驅除ヲ行フヲ最モ有効トス
冬期越冬中ノ幼蟲ヲ搜索シテ驅除スヘシ
九月中下旬頃蠶麥稈ノ束ネタルモノ或ハ席片ノ類ヲ桑園ノ各所ニ配置シ越冬スヘキ幼蟲ヲ誘ヒ落葉後收集メ燒棄スヘシ

くわのわだしやく
桑枝尺

蠮螋

クワノシヤ
クトリ

桑

スノミナラス翌年ノ發芽ニ至大ノ損
失ヲ與フ又本蟲ノ糞汁ノ附着セル桑
葉ヲ蠶兒ニ與フ時ハ病蠶ヲ生シ易キ
ヲ以テ注意セサルヘカラス

幼蟲ハ恰モ枯枝ノ如キ色彩ヲ有スル
害蟲ニシテ年二回ノ發生ヲナシ幼蟲
態ニテ桑ノ幹枝ニ固着シテ越冬シ早
春ヨリ新芽ヲ食害シ六月上旬頃老熟
シテ地表ニ近キ枝幹ノ間ニ灰褐色ノ
粗繭ヲ營ミテ蛹化シ二週間後羽化シ
テ桑葉ノ裏面若クハ枝條ニ卵ヲ二三
十粒宛群産シ幼蟲ハ桑葉ヲ食害シ八
月下旬ニ再ヒ羽化産卵シ二三齡ノ幼
蟲態ニテ越年ス

一年三回ノ發生ヲナシ幼蟲態ニテ枯
葉或ハ莖幹ノ裂目等ニ越冬シ早春出

冬期桑園ヲ巡視シテ幼蟲ヲ捕殺シ早
春結束ヲ解キタル後小枝ニ擬シテ靜
息セル幼蟲ヲ捕殺スヘシ
六月及九月頃桑葉ノ裏面若クハ枝條
ニ群産セル卵ヲ採集潰殺スヘシ

金^{きん} 帖^け
ク^ク モ^{モン} シ^シ ロ^ロ ド^ド
蠟^じ

桑^{くわ} 姫^{のひめ} 象^{ぞう} 鼻^{びし}
蟲^{むし}

桑、果
樹類、櫻

桑

テ加害ス後六月上旬七月下旬九月中
旬ノ三四ニ成蟲羽化シテ卵ヲ葉裏ニ
群産シテ黄毛ニテ被フ幼蟲ハ桑葉ヲ
食害スルモ特ニ春季未タ開綻セザル
芽ヲ害スルト春蠶期伐切後ニ伸長セ
ル夏芽ニ集リ加害スルヲ以テ其被害
甚シ且ツ本蟲ハ毒毛ヲ有スルヲ以テ
蠶兒ニ觸レシムル時ハ黒斑病ヲ起サ
シメ忽チ斃死セシム

全體黒色ノ小形ナル象鼻蟲ニシテ一
年一回發生シ成蟲又ハ幼蟲態ニテ桑
樹ニ材中ニ越冬シ春期發芽期ニ出テ
、芽ヲ食害シ六月頃發芽ノ直下ニ孔
ヲ穿チテ一粒宛産卵ス幼蟲ハ木質部
ニ蠶入シ材質ヲ食シテ成長シ八月頃
其内ニ於テ蛹化シ次テ羽化シテ成蟲
ノ儘枯枝中ニ越冬スレトモ幼蟲態ニ
テ越冬スル地方モアリ

春期發芽前枝幹ニ現ハレタル幼蟲ヲ
捕殺スヘシ
桑葉開展後幼蟲ヲ捕殺スヘシ
本種ノ發生多キ桑園ノ桑ハ可成水ニ
テ洗ヒタル後蠶兒ニ與フヘシ然ラサ
レハ毒毛ノ爲メ蠶兒ニ被害ヲ及ボス
コトアリ

夏期株直シノ際直チニ作土粗穀又ハ
鋸屑ヲ以テ尖端ノ漸ク埋マル程度ニ
蔽ヒ成蟲ノ産卵ヲ豫防スヘシ
冬期枯枝中ニ越冬セルヲ以テ其年内
ニ枯死シタル枯枝ヲ小鋸ニテ切り取
リ燒棄スヘシ

桑くわい天かみ牛ぎ
鐵砲蟲てっぽう、ケ
キリ

桑、無
花果其
他

口、病 害

病 名

病 狀

原 及 ヒ 誘 因

防

除

法

本病ハ桑ノ根ニ寄生スル病菌ニシテ之レカ
寄生ヲ受ケタル時ハ根ノ表皮面ニ紫色ノ紋

桑苗購入ノ際能ク根部ヲ檢シ紫色紋羽狀ノ
モノ附着セバ其苗ハ取除キ植付クベカラズ

二年ニ一回ノ發生ヲ營ミ卵又ハ幼蟲
態ニテ越年シ成蟲ハ七八月頃桑園ニ
現ハレ樹皮ヲ嚙ミテ傷ケ其中ニ一粒
宛産卵ス幼蟲ハ鐵砲蟲ト稱シ材部ヲ
食害シテ孔道ヲ穿ツ幼蟲ノ侵入セル
モノハ排泄孔ヨリ蟲糞ヲ出セルヲ以
テ容易ニ發見シ得ヘシ

上記ノ外桑ノ「スリツプス」「クワジラミ」「オホヨコバイ」「チマダラヨ
コバイ」「アオバハゴロモ」「スカシノメイガ」「桑巢蟲」「クワノトゲシヤク
トリ」「クワコ」「桑心止玉蠅」、黒金龜子、虎天牛、桑葉蟲、カサハラハ
ムシ等アルモ略ス

七八月頃産卵部ヲ搜索シテ卵ヲ潰殺
スヘシ
七八月頃桑園ヲ早朝見廻リ成蟲ヲ捕
殺スヘシ
幼蟲ノ侵入セルモノハ蟲糞ヲ出セル
ヲ以テ此部ヲ小刀ニテ少シク削リ廣
メ針金ヲ挿入シテ蟲體ヲ刺殺スカ又
ハ百部根、青酸加里ノ小塊等ヲ挿入
スヘシ

桑くわのむらさき紫
紋羽病もんはびやう

羽狀ノモノヲ附着シ此紋羽狀ノモノハ繁殖
スルニ從ヒ樹ハ次第ニ衰弱シ葉ハ黃色ヲ呈
シ普通ヨリ早ク落葉シ遂ニ枯死スルニ到リ
順次其近傍ニ蔓延ス

本病ハスチビネラ、プルブレア菌ノ寄生ニ
ヨル苗ニ寄生シテ來ルモノト土壤中前作物
ニ寄生シアリタルモノ、殘リタルモノヨリ
傳染シ來ルモノトアリ

桑萎縮くわのいしゆく病びやう

本病ニ罹リタル桑株ハ幹餘リ伸長セスシテ
細ク葉ハ縮少シテ俗ニチバミト稱シ各地ノ
桑園ニ多ク認ムル所ノモノナリ
本病ノ病原ハ寄生菌ニアラスシテ生理的即
チ過度ノ摘採又土地關係ヨリ來ル所ノモノ
ナリ
發病シタル親木ヨリ取りタル苗ハ發病多シ
強硬ナル土地又ハ排水不良ナル地ニ栽植シ
タルモノニモ多シ餘リ急激ノ肥培ヲナシタ

苦シ發病ノ恐レアル苗ハ生石灰一貫匁ヲ水
一斗ニ溶キタル液ニ一時間程浸シ置キテ後
植付クヘシ
病株ハ掘取りテ焼却スヘシ
病株ヲ掘取りタル跡地ニハ直チニ苗ヲ植付
クヘカラス四五年間休閒シ其間ハ成可穀類
ヲ栽培スルヲ可トス

餘リ過度ノ摘葉ヲ避ケヘシ
肥料ニハ窒素質ノモノノミチ一時ニ多量ニ
用ユヘカラス
強硬ナル土質ノ地ニ栽培セサルコト
排水不良ノ地ハ排水ヲ良好ナラシムヘシ
成苗ク堆肥等ノ有機質肥料ヲ用フベシ

ルモノニモ亦發病多シ

本病ハ桑幹ノ中途又ハ芽ノ基部等ニ赤褐色ノ變色部ヲ生シ此部ハ急激ニ増大シテ遂ニ枯死スルニ至ル多ク早春發病ス

病斑部ハ後ニ到リ微細ナル小突起ヲ無數ニ生スルニ至ル是レ本病ノ病原體ナリ

本病ハドシチブシス、モウリート稱スル菌類ノ寄生ニヨリテ發病スルモノナリ

種類ニヨリ被害ニ厚薄アリ又秋期餘リ甚シク摘採シタルモノニ多シ

種類ニ注意シ成ルヘク此病害ニ強キモノヲ撰ヒテ栽植スヘシ

例ハ本縣ニ於テハ魯桑系ノモノニテ岩瀬桑又ハ白桑ト稱スルモノニ多シ

早春發病ヲ認メハ夏秋蠶用ノモノナレハ直チニ根莖ヲナシ其幹ヲ園内ヨリ他ニ搬出スヘシ

餘リ窒素質肥料ノミチ施用スヘカラス

桑胴枯病

此外本縣下ノ桑園ニハ左ノ數種ノ病害ヲ認ムルモ餘リ甚シカラサルヲ以テ茲ニハ唯其名稱ノミヲ列舉セン

桑赤澁病、桑裏白澁病、桑表白澁病、芽枯病、白紋羽病、膏藥病、根朽病、枝枯病、ヒジケ病、褐紋病等アリ

第三、園藝作物ノ病害蟲

一、柑橘ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

名	稱	被害植物	經 過	習 性	防 除	法
いせりや かいがむし 介殼蟲	介殼蟲	柑橘、梨、柿、茶、桑、南天、萩、ニシダ、大豆、其他	年二回乃至三回ノ發生チナシ幼蟲態ニテ越年シ翌春五六月頃縱線チ有スル白色臘質ノ卵囊チ分泌シ此内ニ多數産卵シ第二回ハ七八月頃ニ發生ス	春期早ク發生シタルモノハ其年ノ十一月頃ニ至リ第三回ノ發生チナス幼蟲ハ多ク葉裏小枝等ニ寄生スレトモ成蟲ハ幹ニモ寄生シ多數集合スル傾キアリ幼蟲成蟲共ニ樹液チ吸收シ繁殖迅速ニシテ被害劇甚ナリ又甘液チ分泌シ煤病チ併發セシムルコト甚シ	苗木購入ノ際ハ特ニ注意シ本蟲ノ發生地ヨリ取寄スルチ避ケ無被害ノモノヲ撰ミ必ス青酸瓦斯ノ燻蒸チ行ヒタルモノヲ栽植スヘシ	發生チ認メバ直チニべたりあ瓢蟲チ放飼スヘシ
綿吹介殼蟲 吹介殼蟲 いせりあ介殼蟲	吹介殼蟲	柑橘、梨、柿、茶、桑、南天、萩、ニシダ、大豆、其他	一月頃ニ至リ第三回ノ發生チナス幼蟲ハ多ク葉裏小枝等ニ寄生スレトモ成蟲ハ幹ニモ寄生シ多數集合スル傾キアリ幼蟲成蟲共ニ樹液チ吸收シ繁殖迅速ニシテ被害劇甚ナリ又甘液チ分泌シ煤病チ併發セシムルコト甚シ	苗木購入ノ際ハ特ニ注意シ本蟲ノ發生地ヨリ取寄スルチ避ケ無被害ノモノヲ撰ミ必ス青酸瓦斯ノ燻蒸チ行ヒタルモノヲ栽植スヘシ	發生チ認メバ直チニべたりあ瓢蟲チ放飼スヘシ	被害樹ニハ冬期青酸瓦斯燻蒸チ施行スヘシ

かめのこかいがら
龜甲介殼

蟲

蜜柑ノ綿介殼蟲

柑 橘

年二回ノ發生ニシテ幼蟲態ニテ越年シ翌春五六月頃老熟シテ自色ノ卵囊ヲ分泌シ其内ニ多數産卵シ續テ孵化ス第二回ハ八月中下旬産卵シ九月中旬頃孵化ス幼蟲成蟲共ニ葉裏等ニ寄生シ樹液ヲ吸收シテ樹ヲ衰弱セシム又蜜液ヲ分泌シ蟻ヲ誘ヒ煤病ヲ誘發セシム

苗木ハ無被害ノモノヲ撰ミ必ス青酸瓦斯燻蒸ヲ行ヒタルモノヲ栽植スヘシ
被害樹ニハ冬期石油乳劑七八倍液又ハ松脂合劑ヲ撒布スヘシ
青酸瓦斯燻蒸ヲ施行スヘシ
夏期幼蟲發生期ニハ松脂合劑冬期使用ノモノヲ二倍ニ稀釋シテ撒布スヘシ

るびー 蠟
蟲

アブキカヒ
ガラムシ

柑 橘、梨、柿、梅、茶、桑、椿、山茶花、其他

年一回ノ發生ニシテ受精シタル雌蟲態ニテ越年シ翌年六月下旬ヨリ七月下旬ニ亘リテ體下ニ産卵シ孵化シタル幼蟲ハ新梢又ハ葉面ニ寄生シテ樹液ヲ吸收シ又煤病ヲ誘發セシムルヲ以テ被害甚大ナリ

青酸瓦斯燻蒸ハ一千立方尺ニ對シ青酸加里三百瓦燻蒸時間一時間以上行フヘシ
七月中旬乃至八月上旬頃松脂合劑（松脂六十匁苛性曹達百匁水二斗）ヲ二回位撒布スヘシ

あかまる
介殼蟲
赤色丸介殼蟲

柑橘、
無花果、
梨、葡萄、
荷、薔薇、
柳、檳榔等

丸介殼蟲
黒色介殼蟲
フタカヒカ
ラムシ、茶
ノ丸介殼モ
ドキ

柑橘、
梨

年二回ノ發生チナシ雌蟲態ニテ越年
シ六月中旬頃ヨリ胎生繁殖ヲ營ミ七
月下旬雄蟲羽化ス七月中旬第二回ノ
繁殖チナシ十月中旬頃雄蟲羽化シ交
尾シタル雌蟲ニテ越年シ翌年ノ繁殖
ヲ繼續ス此蟲ハ好ンテ葉裏ニ寄生シ
養液ヲ吸收シ又果實ノ表面ニ寄生シ
テ著シク外觀ヲ損ス

年一回ノ發生ニシテ雌蟲態ニテ越年
シ翌年五六月頃産卵シ孵化シタル幼
蟲ハ八月中旬ニ至リ雄蟲ト交尾シ受
精セル儘越冬ス此害蟲ハ好ンテ新梢
ニ寄生スレトモ雄蟲ハ多ク葉面ニ寄
生シ又果實ノ表面ニ寄生シテ大ニ外
觀ヲ損ス殊ニ温州蜜柑夏橙ノ果實ニ
多シ

龜甲介殼蟲ニ準ズ

右

同

蜜柑ノ長介殼蟲

蜜柑ノ長牡蠣介殼蟲
ヒメナガカ
ヒカラムシ
黃色介殼蟲

柑 橘

年二回ノ發生ニシテ雌成蟲態ニテ越年シ翌年五月下旬頃産卵シ續テ孵化ス第二回ハ七月下旬乃至八月上旬ニ産卵シ孵化シタル幼蟲ハ十月中下旬ニ雄蟲ト交尾シ其儘越冬ス第一回發生ノ幼蟲ハ多ク枝葉ニ寄生スルモ第二回發生ノモノハ果實ニ寄生スルモノアルヲ以テ其ノ品質ヲ害シ市價ヲ下落セシム

右

同

こんま介殼蟲

コンマガタ介殼蟲
ハラシノナ
ムシ
ハラシ
イガラムシ

柑橘、無花果、葉蘭其類ノ蘭

暗褐色コンマ形ノ介殼蟲ニシテ年三回ノ發生ヲ營ミ成蟲態ニテ越年シ五月中下旬第一回幼蟲發生シ第二回ハ七月第三回ハ九月上旬發生ス幼蟲ハ枝幹葉ニ寄生シ又果實ニ寄生スルヲ以テ其品質ヲ害スルコト甚シ雄ハ白色ノ繭ヲ造ルヲ以テ區別容易ナリ

右

同

蜜柑ノ粉
介殼蟲

柑

橘

介殼チ有セス白色橢圓形ノ介殼蟲ニシテ年三回乃至四回ノ發生ヲ營ミ幼蟲態ニテ越年ス主トシテ葉ノ交叉セル部分葉捲蟲ノ被害セル箇所等ニ潜伏シテ寄生シ又果實ノ果梗及果實ト葉ノ密著セル箇所等ニ寄生シテ果實ヲ害スルカ爲メ寄生部ハ早クヨリ黃色ヲ呈シ外觀ヲ損ス

右

同

蜜柑ノ粉
介殼蟲

柑

橘

此種ハ一見介殼蟲ニ酷似スレトモ全然性質異リ介殼蟲ト蚜蟲トノ中間ニ位スル粉蝨科ニ屬スル小蟲ニシテ年四五回ノ發生ヲナスモノ、如ク冬期ハ幼蟲態ニテ越年シ翌年五六月頃蛹化シ次テ羽化シ嫩芽ノ葉面ニ點々産卵シ孵化シタル幼蟲ハ介殼蟲ト等シク口吻ヲ葉肉内ニ挿入シテ養液ヲ吸

右

同

蜜柑ノ蚜
蟲

柑
橘

收シ又盛ニ煤病ヲ併發セシメ樹勢ヲ衰弱セシムルノミナラス果實ノ外觀ヲ損シ品質ヲ害ス

此種ハ春期四五月ノ頃ヨリ秋期十一月ニ至ル間新芽ニ群集シ盛ニ胎生繁殖ヲナシ秋末ニ至リ初メテ雌雄ヲ生シ幹枝ノ日光ニ面セサル部ニ黑色光澤アル卵ヲ產付シ此儘越年ス其繁殖ハ極メテ甚シク被害多ク特ニ開花期後ニ於テ害甚シ

石鹼液又ハ除蟲菊加用石鹼液ヲ蟲態ニ觸ル、様丁寧ニ撒布スヘシ

星天牛

柑橘、
無花果

此蟲ハ俗ニ「けきり」ト稱シ黑色ニシテ白色ノ斑點ヲ多數散在ス成蟲ハ六七月頃出テ、樹幹ノ下部地上約五六寸以內ノ場所ニ外皮ヲ傷ケ内部ニ一粒宛產卵ス之ヨリ孵化シタル幼蟲ハ

成蟲發生期ニ先チ地上約一尺位ノ所マテ幹部ヲ新聞紙棕櫚又ハ竹皮ニテ包ムカ或ハ泥土ヲ塗りテ產卵ヲ豫防スヘシ
成蟲ノ發生期ニ當リ早朝園内ヲ巡視シ成蟲ヲ捕殺シ又ハ產卵箇所掘テリ

柳天牛、ゴ
マカミキリ、
クワゴマダ
ラカミキリ

柳等

赤^{あか}
壁^た
蝨^に

柑
橘

初メ樹幹ノ周圍ヲ喰ヒ廻リ後木質内ニ喰入シ樹幹ニ空筒ヲ穿チ樹勢ヲ衰弱セシメ甚シキハ樹ヲ枯死セシムルコトアリ此幼蟲ハ俗ニ鐵砲蟲ト稱シ三年目ニ蛹化シ次テ羽化ス

此蟲ハ壁蝨目ニ屬スル赤色微小ノ害蟲ニシテ春夏期ニ亘リテ盛ニ發生加害ス年十數回ノ發生ヲ營ミ三月上旬頃ヨリ赤色ノ卵ヲ葉裏ニ産付シ孵化シタル幼蟲ハ葉裏ニアリテ養液ヲ吸收ス故ニ葉ハ綠色ヲ失ヒ黃白色ニ變シ遂ニ落葉スルニ至ル此蟲ハ降雨少

テ卵ヲ採集スヘシ
既ニ木質内ニ蝕入シタルモノハ侵入口ヲタドリ切開キテ幼蟲ヲ捕殺スヘシ
被害稍々甚シク衰弱セルモノハ被害ノ上部ニ根接ヲ行フヘシ

石灰硫黃合劑ノホーメー〇・五度乃至二・度ノモノヲ撒布スヘシ
曹達硫黃合劑ノ四五十倍液ヲ撒布スヘシ

つゝのまた液(ツノマタ百匁ヲ水三斗ニ溶解シタルモノ)ヲ晴天ノ日ヲ撰ミ丁寧ニ撒布スヘシ

石鹼液又ハ除蟲菊加用石鹼液ヲ撒布スヘシ

以上藥液ハ單ニ一回ノ撒布ニテハ充分ノ効ヲ奏シ難シ發生當時ノ天候其

蜜柑ノ锈
壁蝨

柑

橘

ナリ旱天ノ續キタル時繁殖極メテ迅速ニシテ激甚ナル被害ヲ及ホスコトアリ

本蟲ハ前種ヨリ微小ニシテ楔形ヲナシ白色ニシテ光澤アレトモ生長スルニ從ヒ淡褐色ヲ呈ス肉眼ニテハ唯果面ニ塵芥ノ付著スルカ如ク見ユ本種ハ從來蜜柑ノ象皮病ト稱セシ病害ノ原因トナルモノニシテ冬期ハ葉裏ニ越冬シ七月頃ヨリ果面ニ移リ日光ノ直射スル部分ニ寄生シテ加害ス初メ淡褐色ヲ呈シ益々繁殖スルニ從ヒ全部黒褐色トナリ外觀チ醜惡ナラシムルニ至ル特ニ旱天打續ク時ハ繁殖蔓

他ノ狀況ニ鑑ミ一週間乃至十日ヲ隔テ、數回繼續施用スルノ要アリ又藥液ハ可成強力ノ噴霧器ヲ以テ凡テ葉裏ニ向テ丁寧ニ灌注スルヲ怠ルヘカラス

四〇

前年被害果アリタル園ハ冬期必ス石灰硫黃合劑石油乳劑又ハ松脂合劑ヲ以テ豫防的驅除ヲ行フコト
七八月園内ヲ巡視シ被害果ヲ發見セハ直チニ摘採シテ處分スルコト
七八月發生ノ初期ニ當リ濃厚石灰硫黃合劑百倍液ヲ撒布スヘシ其他赤ダニニ準ス

延シテ遂ニ全園ニ害ヲ及ホスコトアリ
上記ノ外青羽々衣、クダマキドキ、アゲハテフ、エカキムシ、葉捲蟲類、木葉蛾類、桃心喰蟲、クワスムシ、ハナモグリ等アルモ略ス

口、病 害

病 名	病 狀	病 原 及 ヒ 誘 因	防 除 法
瘡痂病 そうかびやう	本病ハ柑橘類ノ果實、葉及ビ幼梢ニ始メ淡褐色ニシテ後灰白色ノ不規則ナル尖レル疣狀突起ヲ生ジ果實ノ外觀品質ヲ損ズル柑橘園到ル所ニ見ル病害ニシテ方言カサ、イボ、カサツパチコヅウ等ト稱スル普通ノモノナリ 紀州蜜柑、九年母、温州橙等多ク害ヲ被ル クラドスポリウム菌ノ一種ノ寄生ニ依リ起ル所ノモノナリ 柑橘園ノ到ル所ニ普通發病スレトモ若樹ニ	本場豫防試驗ノ成績ニ依レハ三四月ノ交及ヒ五六月ノ交ニ於テ一二回三斗乃至四斗式石灰ボルドウ液ヲ撒布スレハ大ニ効果アリ 肥料ノ配合ニ注意シ餘リ窒素質肥料ニ傾カサルコト	

煤病

多キ傾アリ又窒素質肥料ヲ過用シタルモノ多シ
柑橘類ノ枝葉及ヒ果實ノ煤色ヲ呈スル處ノモノニシテ俗ニソブ、クロソブ、ス、等ト稱ス死物寄生菌ナルメリオラ屬或ハカブノデイユム屬等ノ菌類ノ寄生ニ依リテ生スルモノナリ
此ノ病ハ主トシテ介殼蟲、蚜蟲、粉蝨ノ寄生ニ依リテ誘發スルモノナリ

勉メテ介殼蟲、蚜蟲、粉蝨ヲ驅除スヘシ

炭疽病

本病ハ葉及ヒ嫩梢果實ニ發病ス其ノ色淡褐黃色ノ直徑一分乃至二分ノ圓形又ハ不正形ノ病斑ヲ生ス後ニ到リテ其ノ病斑中ニ黑色粒體ノモノヲ無數ニ散在ス

勉メテ枯枝ヲ剪除スヘシ
發病前石灰ボルドウ液ヲ撒布スヘシ

コルトトリクムグレオスボリガイテス菌ノ寄生ニ依ル
特ニ早生温州ニ發病多シ

病^{びやう} 裾^{すそ}

腐^{くされ}

潰瘍^{かいようびやう} 病

本病ハ多ク地上數寸ノ樹幹ニテ初メ樹脂ヲ分泌シ後樹皮剝離シテ其ノ部腐敗シ漸次衰弱シテ遂ニ枯死スルモノナリ
本病ハ細菌ニ依リテ起ルモノ、ゴトシ多ク腐植土ノ如キ所ニ發病シ又肥沃地ニ望素質肥料ヲ過用シタル時ニ多シ

本病ハネーヴル、オレンジ夏橙等ノ葉幼梢果實ニ寄生スル病害ニシテ從來ネーヴルノ瘡痂病ト稱呼シ來レルモノナリ、コノ病ハ始メ小サキ圓形ノ斑點ヲ現ハシ個々ナルモノアリ集合スルモノアリテ周圍ハ少シク隆起シ淡褐色海綿狀ヲナス果實ハ之レカ爲メ落ツルコト多シ
本病ハプソイドモナスシトリート稱スル細

被害部ヲ初期ニ於テ銳利ナル小刀ニテ削リ取り濃キ石灰ボルドウ液又ハ昇汞水ニテ消毒シ置クヘシ
樹勢ノ衰弱シタルモノハ柚、枳殼等ノ根接ヲ行フヘシ
排水ヲ良クスヘシ
勉メテ施肥ヲ早メ餘リ夏秋ノ芽ヲ徒長セシメサルコト

本病ノ豫防法トシテハ六月上旬ヨリ八月ニ涉リ三回位ボルドウ液ヲ撒布スヘシ
ネーヴル園ノ周圍ニハ枳殼垣ヲ作ラサルコト
間作ニ夏橙文旦等ヲ植ヘサルコト

菌ノ寄生ニ依リテ起ルモノニシテ葉及ビ幼
 槍等ノ病斑内ニテ越年シ初夏六月頃ヨリ夏
 秋ニ渉リテ傳染蔓延ス
 望素質肥料ナ多ク施シタルモノ、夏秋ノ芽
 ニ多シ

因ニ記ス此ノ外本縣ノ柑橘ニハ左ニ掲クル種々ノ病害アレトモ唯病名ノミヲ左ニ掲
 ク

虎斑病、護膜病、折裂病、紫紋羽病、白絹病、根朽病、葉枯病、褐色小圓星病、青
 黴病、脂病、斑葉病等ノ發生ヲ認ム

二、梨ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

名	稱	一被害植物	經	過	習	性	防	除	法
---	---	-------	---	---	---	---	---	---	---

さんほせ
 梨、苹

年三回ノ發生ヲナシ冬季ハ幼蟲及ヒ
 雌蟲態ニテ越年シ第一回ハ五六月ノ
 交第二回ハ七月ヨリ九月ニ亙リ第三
 回ハ九月ヨリ十一月ニ至リ胎生繁殖
 苗木ハ能ク検査シ介殼蟲ノ附著セサ
 ルモノヲ撰ミ必ス青酸瓦斯燻蒸施行

介殼蟲
梨丸介殼蟲

果、桃、柑橘、梅、杏、李、葡萄等

梨果ノ鋸蜂

梨實葉蜂
梨ノミノコ
ギリハチ

梨果

テ營ミ分婉期甚タ長ク約六週間ニ渉リ日々數頭ノ幼蟲ヲ產出ス幼蟲ハ數時間這行シ樹幹枝條及葉面果實ノ表面ニ固着シ養液ヲ吸收ス被害ノ局部ハ赤紫色ニ變シ果實ハ表面ニ凸凹ヲ生シ不正形トナリ大ニ品質ヲ損ス繁殖甚シキ時ハ介殼相重疊シ全ク樹面ヲ掩ヒ爲メニ枝葉ノ枯死スルコト稀ナラス

黑色小形ノ葉蜂ニシテ年一回ノ發生ヲナシ成蟲ハ四月上旬ヨリ中旬ニ互リテ羽化シ成蟲ハ晴天無風ノ溫暖ナル日中ニハ盛ニ花間ヲ飛ヒ廻リテ花托ノ組織内ニ產卵シ孵化シタル幼蟲ハ果實ノ内部ヲ喰害スルヲ以テ果ハ黑色トナリ萎凋スルニ至ル一果ヲ喰盡スレハ更ニ他ノ果實ニ移轉喰害ス

ノモノヲ栽植スヘシ早春發芽前石灰硫黃合劑ボーメー四度ヲ灌注スヘシ被害樹ハ冬期石油乳劑ノ三倍乃至五倍夏季ハ十倍乃至十五倍液ヲ撒布スヘシ被害甚シキ部ハ切り取り焼却スルコト

開花期ニ成蟲ヲ鳥糞ニテ捕殺スルコト花萼片及梨果等ニ產卵シタルモノ又ハ喰入シタルモノハ悉ク摘採シテ處分スルコト梨果ノ小指頭大ニ生育シタル頃落果シタルモノハ毎月拾ヒ集メ焼却スルコト

梨^{なし}
ミナシキツラ^{じらみ}

梨

ルヲ以テ其被害甚シ幼蟲ハ五月上中旬頃老熟シテ土中ニ入り結繭シテ其内ニ蟄シ幼蟲ノ儘越年ス

年一回ノ發生ヲナシ成蟲ハ梨ノ發芽ト共ニ現ハレ花蕾及嫩芽又ハ葉縁ニ多數産卵シ孵化シタル幼蟲ハ初メ嫩芽花蕾等ニ集合シテ養液ヲ吸收スルカ故ニ著シク葉ノ伸長ヲ妨ケ甚シキハ黄變凋落ス成長スルニ從ヒ新梢ニ移轉シ一層害ヲ逞フス又甚シク甘液ヲ分泌シ煤病ヲ併發セシム老熟スレハ葉裏ニ至リ六月上旬成蟲トナリ其儘越年ス

四六

被害後樹下ノ土一寸内外ヲ削リ取リテ地中深ク埋ムルコト
成蟲ノ集來期ニ除蟲菊石鹼液六液又ハ毒劑ヲ撒布スヘシ

卵ハ幼芽ト共ニ摘採焼却スヘシ
幼蟲孵化セハ除蟲菊石鹼液又ハ除蟲菊加用石油乳劑三十倍液ヲ灌注スヘシ
煙草粉ヲ撒布スヘシ
成蟲ハ烏糞ヲ以テ捕殺スヘシ

梨ほしぐし星蛭蜥

梨しんぐい心喰むし蟲

梨、
苹樹

梨

淡黑色ノ小蛾ニシテ一年一回ノ發生
ヲナシ幼蟲態ニテ越冬シ春期發芽ト
同時ニ出テ、花蕾嫩葉ヲ喰害シ成長
スルニ從ヒ葉ヲ兩側ヨリ折り重ネ其
内ニアリテ喰害ス故ニ一名「まんじ
う」又ハ「かしわむし」ト稱ス五月下
旬ヨリ蛹化シ六月下旬成蟲トナリ葉
裏ニ産卵シ孵化シタル幼蟲ハ二三齡
頃ヨリ幹ノ裂ケ目又ハ粗皮間ニ薄キ
繭ヲ作りテ越冬ス

小形暗黑色ノ蛾ニシテ年二回ノ發生
ヲナシ幼蟲態ニテ越冬シ翌年五月下
旬ヨリ梨果ニ喰入り果肉ヲ喰ヒ果柄
ヲ絹絲ニテ纏ヒテ落果ヲ防キ六月上
旬老熟シテ果中ニ蛹化シ下旬ニ至リ
羽化シテ成蟲トナリ果面ニ一粒宛産
卵シ第二回ノ幼蟲ハ九月下旬ヨリ十

卵塊幼蟲蛹或ハ蛾ヲ捕殺スルコト殊
ニ孵化當時ノ幼蟲ハ密集スルヲ以テ
努メテ捕殺スルコト
七月頃枝幹ニ繩ヲ纏ヒ置キ此内ニ潜
伏セシメ秋期繩ト共ニ焼却スルコト
冬期樹ノ粗皮ヲ削リ石油乳劑石灰硫
黄合劑等ヲ塗抹シ潜伏セル幼蟲ヲ殺
スコト

果實ノ果軸ヲ絲ニテ纏ヒアルモノハ
採集シテ焼却スルコト
果實ノ指頭大ニ生育セシ時袋掛ヲ行
ヒテ産卵喰入ヲ妨クヘシ

梨^{なしのひめ}姫^め心^{しん}
 喰^く蟲^{むし}
 桃^{なシノハリ}心折蟲^{ナシノハリ}
 カネムシ

梨果、
 桃、櫻、
 櫻桃

月ニ涉リ花芽ヲ害シ其間又ハ皮間ニ
 入リテ越冬ス

暗灰黑色ノ小蛾ニシテ一年四回乃至
 五回ノ發生ヲ營ミ冬期幼蟲態ニテ越
 年シ四五月頃蛹化シ次デ羽化ス成蟲
 ハ夜間出テ、桃或ハ櫻等ノ嫩芽ニ集
 リ葉脈ニ沿ヒ點々産卵シ幼蟲ハ嫩芽
 ノ内部ニ喰入加害ズ第二回モ同様桃
 櫻等ノ新梢ニ喰入加害シテ心折レテ
 生セシメ七月下旬頃ヨリ一二回梨果
 ニ集リテ果面又ハ袋ノ面ニ産卵シ孵
 化シタル幼蟲ハ果實ノ内部ニ喰入シ
 テ果實ヲ腐敗セシム秋期ニ至リ果實
 テ去リテ繩ノ間棚竹粗皮間又ハ土際
 等ニ粗繭ヲ作リテ越冬ス

梨ヲ主作トスル地方ニテハ附近ニ
 桃、櫻、櫻桃等ヲ植付ケサルコト
 桃、櫻等ノ心折ハ幼蟲ノ逸出セサル
 前切リ取り處分スヘシ
 被害甚シキ園ニテハ眞實ノ袋ヲ丁寧
 ニ掛クヘシ途中破損セルモノハ取換
 ヘチ行フヘシ
 秋期果實ヲ取りタル跡ニ喰入セルモ
 ノヲ勉メテ處分スヘシ
 七月中旬頃ヨリ二三回除蟲菊石鹼液
 テ梨果ニ撒布スルコト

梨ノ葉捲
蟲

梨

軍配蟲
褐色軍配蟲

梨、果、薺、其他

本種ニ數種類アリ其中主ナルモノハ「あかめむし」「なほはまき」「つまなりはまき」「ふたほしはまき」トス共ニ年二三回ノ發生ヲ營ミ春期發芽頃ヨリ秋期ニ至ルマテ葉ヲ捲キ或ハ嫩芽ヲ綴リテ喰害ス「あかめむし」ハ春期嫩芽花蕾及幼果ヲ絲ニテ綴リ其中ニアリテ喰害枯損セシメテ大ニ被害アリ冬期ハ卵若クハ幼蟲態ニテ越冬ス

軍配狀ヲナセル小蟲ニシテ年三回ノ發生ヲ營ミ成蟲態ニテ越冬シ翌年五月下旬ニ至リ新葉ニ來集シ葉裏ノ表皮下ヘ産卵シ孵化シタル幼蟲ハ口吻ヲ組織内ニ挿入シテ養液ヲ吸收スルカ故ニ葉ハ白色ノ小斑點ヲ顯ハシ甚ダシク被害セラレタル時ハ黄褐色ヲ

新芽嫩葉ヲ綴リ其内ニ潜伏セル幼蟲及蛹ヲ葉ト共ニ摘採スルコト
成蟲ヲ捕殺スルコト
冬期枯葉落葉等ヲ集メテ焼却スルコト
開花前後ニ除蟲菊石鹼液又ハ六液ヲ撒布スヘシ

石油乳劑十倍乃至十五倍液ヲ灌注スヘシ
除蟲菊加用石油乳劑ノ二三十倍液又ハ除蟲菊石鹼液ヲ撒布スヘシ

觀賞植物等

呈シテ落葉スルニ至ル六月下旬ヨリ
 第一回ノ成蟲トナリ第二回ハ八月上
 中旬第三回ハ九月中下旬頃ニシテ此
 成蟲ハ落葉塵芥等ノ下又ハ樹枝等ノ
 間隙ニ潜伏シテ越冬ス

上記ノ外梨白長介殼蟲、長黒星介殼蟲、角蠟蟲、粉介殼蟲、密柑ノ丸
 介殼蟲、蚜蟲、梨椿象ミノムシ、ピストルミノムシ、キンケムシ、ヒ
 メマルハムシ、アカダニ、サビダニ等アルモ略ス

口、病 害

病 名	病 状	病 原 及 ヒ 誘 因	防 除 法
赤星病 あかはしびやう	春四五月ノ交梨ノ葉面葉柄果梗果實等ニ橙 黄赤色ノ斑點ヲ生シ其ノ被害部ハ次第ニ膨 レ後葉ノ裏面ニハ毛狀ノ突起ヲ生ス		
	本病ハヂエムノスボラシジエム、ジャボ ニクムト稱スル病菌ノ寄生ニ依リテ起ルモ ノナリ		
	梨園近傍ニ本病ノ中間寄主植物タリ杜松		
			梨園ノ近傍ニアル杜松、檜柏等ハ共同シテ 伐採スヘシ
			梨葉ノ開展前ヨリ雨後直チニ石灰ボルドウ 液ヲ數回撒布スヘシ

黒星病くろほしびやう

(方言ハイバラ、ヒモロ、ベホウ、ネズミザシ) 檜柏(ビヤクシン)等アリテ之レニ寄生スルヲ以テ注意スヘシ

本病ハ梨ノ葉柄、葉脈、果實、嫩枝ヲ犯シ其ノ被害部何レナ間ハス帶緑黑色ノ斑點ヲ生シテ粉狀ヲ呈ス後黒褐色ニ變ス之レカ爲メ果實ハ著ク被害ヲ蒙リテ龜裂ヲ生ス

本病ハヴエンツリア、ピリナト稱スル病菌ノ寄生ニ依リ起ル所ノモノナリ

氣候溫カニシテ陰濕殊ニ降雨頻繁ナル時或ハ窒素質肥料ヲ過用シタル時又ハ種類ノ如何ニ依リ寄生ノ如何ニ大ナル關係アルモノナリ

以上ハ梨病害ノ主ナルモノニシテ此ノ外ニ葉腫病、炭疽病、黒枯病、褐斑病、花腐病、胴枯病、腐爛病、癌腫病、白紋羽病、膏藥病、白澁病、苦腐病、輪紋病、黒腐病等アルモ畧ス

嫩枝ノ被害箇所ハ勉メテ剪定スヘシ

落葉ハ掻キ集メテ燒棄スヘシ

開花前ヨリ果ノ小指大トナル頃迄ニ四斗式

石灰ボルドウ液ヲ撒布スヘシ

注意 若シボルドウ液ノ被害ヲ認メタレ

ハ薄キ水肥ヲ施シ置クヘシ

害ヲ受ケ易スキ種類ハ可成注意シテ植ヘザ

ル様ニスヘシ

例ヘハ水熊、獨逸、赤龍、平四、上花等

三、桃ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

名	稱	被害植物	經過	習性	防除	法
桃ノ心喰 蟲 しんくひ	桃實蟲、 イノゴマダ、 ラ、ゴマダ、 ラノメイガ	桃、梨、 柑橘、 栗、 李	此蟲ハ黃色ニシテ黑色ノ小斑點ヲ散 在セル小形ノ蛾ニシテ年二回ノ發生 ヲ營ミ第一回ハ五六月頃第二回ハ七 八月頃羽化シテ果面ニ點々産卵シ幼 蟲ハ直ニ果實内ニ喰入シ之ヲ落下セ シメ十月頃ニ至リ老熟シテ土中又ハ 樹ノ裂ケ目等ニ結繭シ其儘越冬シ翌 年五月ニ至リ蛹化ス	此蟲ハ紫褐色ノ美麗ナル光澤ヲ帶ビ タル小甲蟲ニシテ年一回ノ發生チナ シ成蟲ハ五月上中旬ヨリ出テ長吻チ 以テ桃梨等ノ幼果ニ挿入シテ液汁チ	果實ノ袋掛ハ時期ヲ誤ラサル様嚴重 ニ實行スヘシ 被害果ハ落下シ又ハ「やに」ト共ニ枝 幹ニ附著セルチ以テ集メテ肥溜ニ投 入スルカ或ハ燒却スヘシ	成蟲發生期ニ當リ早朝樹チ急ニ振ヒ 地上ニ落下セシメ捕殺スヘシ
桃象鼻蟲 ちよつきりし チヨツキリ ゾウムシ		桃、梨、 苹果、				

桃象蟲、チ
ヨツキリム
ガシ、ハスナ

枇杷、
梅等

桃
ノ
蚜蟲あへむし

桃

吸收シ傷クルト同時ニ果肉ニ一粒宛
卵チテ産入シ其ノ果實ノ果柄チ嚙ミ
切り置クヲ以テ孵化シタル幼蟲ハ果
肉チ喰害シ稍々生長スルニ至レハ落
果シ七月上旬ヨリ老熟ンテ果實チ出
テ土中ニ入り粗繭ヲ作り成蟲トナリ
越冬ス

桃樹ニ寄生スル蚜蟲ニ二種類アリ一
ハ嫩葉ヲ捲キ其内ニアリテ被害シ他
ハ綠色ニシテ嫩葉裏ニ群生シ常ニ
白粉チ分泌シテ加害スルモノナリ二
種共何レモ春期四五月頃ヨリ出テ十
一月頃マテ盛ニ繁殖シ秋末ニ至リ初
メテ雌雄チ生シ交尾後新梢ノ芽邊若
クハ其附近ニ黑色光澤アル卵チ産付
シ越冬ス

果實ノ果柄折レ垂下セルモノ及落果
セルモノヲ集メテ處分スヘシ
袋掛チ行フヘシ

除蟲菊石鹼液又ハ除蟲菊加用石油乳
劑三四十倍液石油乳劑二十倍乃至三
十倍液ノ何レカチ強力ノ噴霧器ニテ
蟲體ニ觸ル、様丁寧ニ撒布スヘシ
發生ノ際青酸瓦斯燻蒸チ十分間内外
ニテ行フヘシ
瓢蟲「ひらたあふ」等ノ益蟲チ保護ス
ヘシ

このはが
木葉蛾ノ類

桃、葡萄、蜜柑、柿、花、蕃茄、果、無

木葉蛾ノ類ニテ果實ヲ害スル重ナルモノハ「あけびのきののは」蛾「こがたのきののは」蛾及「うすえぐりは」ノ三種ニシテ何レモ果實ノ成熟期ニ際シ果園ニ集マリ晝間ハ附近ノ雜木林又ハ草叢中ニ潜伏シ夜間飛翔シ來リ果面ニ針狀ノ口吻ヲ挿入シテ液汁ヲ吸收スルヲ以テ果實ハ其部ヨリ腐敗シ落果スルニ至リ被害少カラス

果實ニハ二重袋ヲ被フコト果實ノ成熟期ニハ夜間燈火ヲ點シ捕蟲網ニテ捕殺スヘシ「あけびの、このは」蛾ノ幼蟲ハアケビヲ食シ「こがたのきののは」蛾ノ幼蟲ハアオツヅラフジノ葉ヲ食スルヲ以テ勉メテ之等ノ植物ヲ除去スヘシ晩桃又ハ梨園ニテハ適宜ノ方法ニヨリ硫黃或ハ鋸屑ヲ風上ニテ燻スヘシ

口、病 害

病 名

病 狀 病 原 及 ヒ 誘 因

防 除 法

たんそびやう
炭疽病

本病ハ四五月ノ交特ニ早生桃ノ果實ヲ犯シ尙中晩何レニモ發生スル病害ニシテ初メ褐色ノ小斑點ヲ現ハシ後其ノ部凹陷シテ淡紅色ヲ呈スル病原胞子塊ヲ密生ス又嫩梢ニ寄生シ或ハ夏季熟果ヲ犯ス事アリ
グレオスボリウム、レチコラート稱スル菌

毎年二、三月ノ交迄ニ前年ノ病果及ヒ果梗ヲ附著スル被害枝ヲ勉メテ剪除燒棄スヘシ春發芽前二斗五升式石灰ホルドウ液ヲ撒布スヘシ
本病ニ抵抗力強キ品種ヲ撰擇シテ栽植スヘシ例ヘバ日月桃、橋早生等ハ比較的耐病性

縮葉病しゅくえびやう

類ノ寄生ニ依リテ起ル所ノモノナリ
陰濕ノ天候打續キタル時ニ發病スル傾アリ
本病モ亦四、五月ノ交嫩葉ニ發生シ爲メニ
被害葉ハ孰レモ卷縮セル畸形ヲ呈シ遂ニ腐
敗枯死スルニ至ル
タフリナ、デリオルマンスト稱スル病菌ノ
寄生ニ依ル

細菌性穿孔病さいきんせいせんこうびやう

毎年六月中旬頃ヨリ七、八月頃最モ多ク發
生シ葉ニ赤褐色ノ小斑點ヲ生シ其ノ部チ中
心トシテ直徑一分内外ノ圓形或ハ不成形ノ
穿孔ヲ生シ甚ダシキ被害葉ハ遂ニ落葉スル
ニ至ル又果實チ犯シ褐色裂傷ヲ生ゼシムル
コトアリ
特ニ暴風雨ノ後ニ蔓延大ナリ
枝ニモ寄生シ痛傷ヲ生ゼシメ此部ニテ越年

ニシテアリツクスメー、アムステンジユン、
トライアンフ等ハ被害大ナリ
一般ニ晩生種ハ被害少シ

春發芽前一、二回石灰硫黃合劑チ撒布ス可
シ

發芽前注意シテ被害枝ヲ剪除ス可シ
李ト混植ス可カラス
落葉ハ悉ク掻キ集メ燒棄スヘシ

ス

本病ハプソイドモナスプルニート稱スル杏ハ黒斑病或ハ穿孔病ト同一病原タル一種ノ細菌ノ寄生ニ依ルモノナリ
特ニ日本産ノ各種ノ杏ハ本病ニ犯サル、事大ナリ

此ノ外本縣ノ桃ニハ左記ノ病害アルヲ以テ參考ノ爲メ其ノ病名ノミヲ記載セン
白葉澹病、黒點病、葉澹病、脂病等アリ

四、柿ノ害蟲ト病害

イ、害 蟲

柿ノ蒂蟲
へたむし

柿 實

暗褐色ノ小蛾ニシテ年二回ノ發生ヲナシ冬期ハ地中ニ土砂ヲ綴リテ繭ヲ營ミ幼蟲態ニテ越年シ翌年六月頃羽化シテ成蟲トナリ果柄或ハ蒂ニ一粒宛産卵シ孵化シタル幼蟲ハ直チニ蒂落果シタルモノハ直チニ拾ヒ集メテ肥溜ニ投入スヘシ

名 稱 被害植物 經 過 習 性 防 除 法

カキノヘタ
クヒムシ、
柿實蟲

柿ノ刺蟲
イラムシ

柿、梨、
苹果、
梅、李、
柘榴、
棗、枇
杷、百
日紅等

ヨリ果肉内ニ喰入シ落下セシメ七月
下旬ニ至リ老熟シテ果實ヲ出テ土中
ニ結繭蛹化シ次テ羽化シ産卵ス之レ
ヨリ出テタル幼蟲ハ九、十月頃果實
ヲ喰害シ成長シテ被害果ヲ出テ土中
ニ結繭シ越冬スルモ稀ニハ樹ノ裂目
及樹皮間ニ結繭スルコトアリ

黄色中形ノ蛾ニシテ年一回ノ發生ヲ
ナシ冬期ハ枝條ニ俗ニスツメノタマ
ゴト稱シ小鳥ノ卵ノ如キ貝殻質ノ堅
キ繭ヲ作り其内ニ幼蟲ノ儘越冬シ翌
年六月ニ至リ蛹化シ次テ羽化シ葉裏
ニ鱗狀ヲナシ産卵ス孵化シタル幼蟲
ハ葉ヲ喰害シ八、九月頃ヨリ老熟シ
前記ノ如キ繭ヲ營ミテ越冬ス此蟲ノ
幼蟲ハ俗ニ「なこぜ」ト稱シ觸ル、時
ハ甚シク痒痛ヲ感ス

柿實ニ幼蟲食入シタル當初ニ當リ針
ニテ蒂部ヲ刺シ幼蟲ヲ刺殺スヘシ最
初ハ餘リ深キ處ニ棲息セサルヲ以テ
本法ハ低作りノモノニ應用シテ可ナ
リ
冬期一寸内外ノ表土ヲ削リ深ク土中
ニ埋没スヘシ

冬期枝條ニ固著セル雀卵ノ如キ繭ヲ
採集スルカ石油ヲ塗抹スヘシ
幼蟲ヲ捕殺スヘシ

上記ノ外ツノロウムシ、ルビロウムシ、蜜柑ノ丸介殼蟲、アオバハ
ゴロモ、ミノムシ、アナムシ、ドーガネブンブン等アルモ畧ス

口、病 害

病 名	病 狀 病 原 及 ヒ 誘 因	防 除 法
黒星病 くろほしびやう	本病ハ葉、新梢及ヒ果實ニ發生ス、而シテ此病ノ新梢ニ發病スレハ長橢圓形ノ黒褐色ヲ呈シ病斑ノ中央少シク凹陷ス爲メニ枯死スルニ至ル、葉ニ發病スレハ稍々圓形ナル小黒點ヲ現ハス爲メニ葉ハ變形捲縮スルニ至ル、果實ニモ寄生ス フザクラゲユウム、ザチスヒシー菌ノ寄生ニ基ク 陰濕氣候打續キタル時ニ發病多シ	前年被害枝ハ勉メテ剪定シテ燒棄スヘシ 發芽前石灰ホルドウ液ヲ撒布スヘシ
落葉病 らくふびやう	六月下旬ヨリ七八月ノ頃ニ互リテ葉面ニ多角不正形ノ病斑現ハレ黒褐色トナリ後橙黃色又ハ紅色トナリテ落葉ス	前年發病地ニアル柿ハ發病前石灰ホルドウ

柿斑點病

ツエルコスポーラ、カキト稱スル病菌ノ寄液ヲ數回撒布スヘシ
生ニヨル

尙此外炭疽病アレトモ略ス

五、葡萄ノ害蟲ト病害

1、害蟲

名 稱 一被害植物 經 過 習 性 防 除 法

ふゐろさ
せら

葡萄根蚜蟲

葡 萄

此蟲ハ葡萄ノ根部ニ寄生スル蚜蟲ノ一種ニシテ年數回ノ發生ヲ營ミ冬季ハ幼蟲卵及無翅ノ成蟲ニテ越冬シ翌春四五月頃ヨリ活動ヲ初ム普通根部ニ集マリ細根ヲ害シ此所ニ多數ノ蟲癭ヲ生ス又時トシテハ地上ニ出テ葉ヲ害シ其ノ裏面ニ瘤狀ノ蟲癭ヲ生セシメ發生甚シキ時ハ樹勢大ニ衰弱シ萎黃落葉スルニ至ル

免疫性ノ種類ヲ栽培スルカ又ハ之レヲ砧木トシテ接木スヘシ
樹幹ヨリ一尺内外ヲ隔テ、土中ニ數ヶ所穴ヲ穿チ之レニ二硫化炭素ヲ注キ土ヲ被ヒ堅ク踏付ケ置クヘシ
根部ノ土中ニ煙草粉又ハ硫黃華ヲ埋没スルコト
冬期園内ニ水ヲ引キ一ヶ月位滯水スヘシ
苗木ハ水洗後青酸瓦斯燻蒸ヲ行フヘシ

金龜子
こがね

葡萄透羽
ぶどうすかしは
ブドーヅカ
シバ

葡萄、梨、柿、苹果、柑橘、豆類

葡萄

此蟲ハ俗ニ「ぶんく」ト稱スル蟲ニシテ種類多クレトモ葡萄ヲ害スル重ナルモノハ「ひめこかれ」「まめこかれ」「さうかれぶんく」等トス年一回ノ發生ニシテ成蟲ハ六月ヨリ九月ニ亙リ多ク現ハレ葉ヲ網狀ニ喰害シ生育ヲ妨害スルコト甚シク又幼蟲ハ土中ニアリテ諸種ノ作物ノ根部ヲ喰害シ枯死セシム冬期ハ幼蟲ニテ土中ニ越年ス

一見蜂形ノ小蛾ニシテ年一回ノ發生ヲ營ミ幼蟲態ニテ莖髓中ニ越冬シ翌春五月頃ニ至リテ蛹化シ六月頃成蟲羽化シ皮面ニ産卵ス幼蟲ハ「てつばうむし」ノ如ク莖體中ニ喰入シテ空

葉ニ寄生シタルモノニハ石油乳劑ヲ灌注スヘシ

成蟲ハ捕蟲網又ハ箕等ニ拂ヒ落シテ殺スヘシ
石灰少許ツゝテ水ニ溶キテ枝葉ニ撒布スヘシ

蟲孔ヲ少シク開キ青酸加里ノ小塊又ハ百部根ヲ挿入シ外面ヲ粘土ニテ閉塞スヘシ
蟲孔ヨリスポイトニテ少許ノ揮發油ニ硫化炭素又ハ除蟲菊浸出酒精五六

筒トナシ枯死セシムルヲ以テ其ノ被
害甚シ
倍液ヲ注射スヘシ
蟲孔ヨリ先端鉤狀ニ屈曲セル針金ヲ
挿入シテ幼蟲ヲ引き出スヘシ
上記ノ外マダラヨコバイ、クワカヒカラムシ、サンホゼーカヒガラム
シ、木葉蛾類、車雀、ブドートリハガ等アルモ畧ス

口、病 害

病名	病狀病原及ヒ誘因	防除法
----	----------	-----

黒痘病

本病ハ葉片、葉鞘及ヒ果實ニ發生スル病害 ニシテ是レカ爲メ幼枝ノ病斑部ハ長橢圓形 黒色ヲ呈シテ發育ヲ防止ス卷鬚モ爲メニ發 育惡ク果實ニハ圓形ノ病斑現ハレ周圍ハ判 然シタル太キ黒線ヲ以テ堺セラル、後ニ至 リテ成熟セスシテ其ノ儘乾燥ス	前年ノ被害枝ハ早ク切り去ルコト 開花期前後ニ於テ二斗五升式石灰ボルドウ 液ヲ其後ハ三斗式ボルドウ液ヲ撒布スルコ ト
クレオスポリウム、アンペロフアグム菌ノ 寄生ニヨル	餘リ窒素質ノ肥料ヲ多ク施用スヘカラス
窒素質肥料ノ過用セル場合ニ發病ノ傾アリ 又濕地ニアル樹ニ發生多シ	

此ノ他晚腐病、露菌病、白澁病等アレトモ茲ニ略ス

六、蔬菜ノ害蟲ト病害

1. 病害

名	稱	被害植物	經	過	習	性	防	除	法
夜盜蟲	菜螟蛉	菜、根、莖、葉、其	年三回ノ發生ニテ蛹態ニテ越冬ス成蟲ハ五六月ヨリ出テ秋末ニ至ル迄絶ヘス花間ヲ翔ヒ廻リ葉面ニ一粒ツゝ産卵ス幼蟲ハ又春ヨリ晩秋ニ至ル迄常ニ十字科植物ノ葉ヲ喰害ス	春秋二回ニ發生シ第一回ノ成蟲ハ五月中下旬頃出テ第二回ハ九月羽化ス卵ハ百粒乃至二百粒位チ一纏メニシテ春ハ多ク豌豆ニ秋ハ蕎麥ノ葉裏ニ産ス幼蟲ハ二三齡迄ハ青色チ帶ヒ葉	卵塊ヲ採集スヘシ卵ハ春ハ豌豆秋ハ蕎麥ノ葉裏ニ多キチ以テ注意スヘシ發生多キ時ハ被害地ノ周圍ニ幅深サ共ニ一尺位ノ溝ヲ掘リ溝底ニハ更ニ一二間毎ニ一尺内外ノ穴チ穿チ置キ幼蟲移轉ノ際此中ニ墜落セシメ之レ				

菜、根、莖、葉、其

年三回ノ發生ニテ蛹態ニテ越冬ス成蟲ハ五六月ヨリ出テ秋末ニ至ル迄絶ヘス花間ヲ翔ヒ廻リ葉面ニ一粒ツゝ産卵ス幼蟲ハ又春ヨリ晩秋ニ至ル迄常ニ十字科植物ノ葉ヲ喰害ス

幼蟲幼少ノ當時除蟲菊木灰又ハ除蟲菊石灰チ葉上ヨリ撒布スヘシ

卵塊ヲ採集スヘシ卵ハ春ハ豌豆秋ハ蕎麥ノ葉裏ニ多キチ以テ注意スヘシ發生多キ時ハ被害地ノ周圍ニ幅深サ共ニ一尺位ノ溝ヲ掘リ溝底ニハ更ニ一二間毎ニ一尺内外ノ穴チ穿チ置キ幼蟲移轉ノ際此中ニ墜落セシメ之レ

エ
ン
ド
ウ
ノ
キ
リ
ム
シ

茄子、
煙草、
麻、蕎
麥、棉、
粟、藍
其他

上ニアルモ三齡以後ハ變色シテ晝間ハ土中ニ潜伏シ夜間ノミ出テ喰害ス發生甚シキ時ハ一園綠葉ヲ殘サス又隊ヲナシテ漸次近隣ノ園場ヲ襲撃スルコトアリ第二回ノ幼蟲ハ地中ニ下リ蛹化シテ越年ス

ヲ捕殺スヘシ
幼蟲孵化當時ハ晝間ト雖葉面ニ群集セルヲ以テ此際除蟲菊加用石鹼水ヲ灌注スヘシ
蛹ハ地中ニアルヲ以テ蛹化ノ時期ニ地表ヲ削リ蛹ヲ切り殺スヘシ
此外夜盜蟲ニ種々アレトモ防除法ハ之レニ準スヘシ

根^ね
切^{きり}
蟲^{むし}
蠶^{さなぎ}

茄子、
大根、
蕪菁、
馬鈴薯
胡瓜、
南瓜、
藍、煙
草、麥、
甘菜等

前種ニ酷似シ年二回ノ發生ニシテ幼蟲態ニテ土中ニ越年シ第一回ノ成蟲ハ五六月第二回ハ九月頃現出シ被害作物ノ根際ノ土中ニ産卵ス幼蟲ハ綠色ニシテ四齡以後ハ變色シテ晝間地中ニ潜伏シ夜間出デテ作物ノ根際ヲ嚙ミ切り或ハ葉ヲ喰害ス

作物ノ根際ニ除蟲菊木灰ヲ五六寸位ノ面積ニ撒布シ置クヘシ
被害ヲ受ケタル作物ヲ發見シタル時ハ速ニ其ノ附近ノ地表ヲ掘り起シ土中ニ潜伏セル幼蟲ヲ捕殺スヘシ又除蟲菊木灰ヲ撒布シ加露ニテ灌水スヘシ必ス地上ニ現ハルヲ以テ之レヲ殺スヘシ

瓜^{うり}
守^{しゅ}
ハムシ

瓜類

橙黃色ノ葉蟲ニシテ年一回ノ發生ヲ
ナシ成蟲態ニテ雜草中ニ越冬シ春氣
四五月頃ヨリ現出シ瓜類ノ根際ノ土
中ニ産卵ス成蟲ハ葉ヲ喰害スレトモ
幼蟲ハ根部ヲ甚シク喰害ス七八月頃
土中ニ蛹化シ次テ羽化ス
黒瓜守ハ本種ニ似テ翅鞘黒色瓜類ヲ
害ス

成蟲ハ早朝捕蟲網ニテ採集スヘシ
移植當時ノ苗ハ寒冷紗ノ覆ヲナシテ
成蟲ノ産卵ヲ豫防スヘシ
除蟲菊木灰ヲ撒布スヘシ

さるはむし

大根、
菜、
菁、
蕪

クロサンシ
ヨウムシ、
ヒメダイコ
ハムシ、
サ
ルムシ

黒色半球狀ノ光澤アル小甲蟲ニシテ
年二三回ノ發生ヲナシ成蟲態ニテ雜
草内ニ越冬シ五六月頃出テ十字科
植物ノ葉肉内ニ點々産卵ス幼蟲成蟲
共ニ葉ヲ喰害シ特ニ秋期大根ニ於ケ
ル被害甚シ

成蟲蛹蟲共ニ轉落性アルヲ以テ箕ニ
拂ヒ落シテ殺スヘシ
幼蟲ニハ除蟲菊木灰ヲ葉上ヨリ撒布
スヘシ
多數發生シタル時ハ除蟲菊石鹼液六
液又除蟲菊石油乳劑ノ三十倍液ヲ撒
布スヘシ

黒色ニシテ黄條ヲ有スル小形ノ甲蟲
ナリ年四五回ノ發生ヲ營ミ成蟲ニテ

發芽當時葉上ヨリ除蟲菊木灰ヲ撒布

黄筋蚤蟲
きすじのみひし

ムシ
キスジトビ
シヨウムシ

大根、
蕪菁、
菜類

二十八星
てんざうひしたま

瓢蟲
ニシユール
ホシ
ナスノサル

茄子、
馬鈴薯、
蕃茄

越年ス成蟲ハ春期四五月頃ヨリ秋晩迄圃場ニ顯ハレ葉ヲ喰害ス卵ハ根際又ハ根部ニ産附シ幼蟲ハ根部ヲ喰害シテ皮部ニ斑紋ヲ現ハシ又腐蝕セシム特ニ夏大根ニ被害甚シ此外茄子蚤蟲アリ黒色光輝アル同形ノ害蟲ニシテ茄子馬鈴薯其他ニ害ス習性前者ニ類ス

成蟲ハ赤褐色ニシテ葉鞘ニ二十八ノ黒紋ヲ有スル小甲蟲ニシテ年二回ノ發生ヲナシ成蟲態ニテ越年シ五六月頃出テ馬鈴薯等ノ葉裏ニ黄色ノ卵ヲ群産ス孵化シタル幼蟲ハ七月頃羽化シ主トシテ茄子等ニ産卵シ七八月頃幼蟲發生シ八九月頃第二回ノ成蟲羽化シ越年ス幼蟲共ニ甚シク葉肉ヲ舐食シテ褐變落葉セシメ特ニ七八月

スヘシ其後發生ニヨリ數日又ハ十日目毎ニ數回連施スヘシ成蟲ハ極メテ活潑ニ跳躍スルモノナレハ布片又ハ箕等ニ重油ノ類ヲ塗リ一方ニ立テカケ他方ヨリ追ヒ拂ヒテ之レニ觸レシムヘシ其他前種ニ準ス

勉メテ卵塊ヲ採集スヘシ幼蟲及成蟲ハ早朝拂落シテ驅除スヘシ幼蟲ノ幼弱ナルモノニハ除蟲菊加用石油乳劑ノ二三十倍液又ハ除蟲菊木灰ヲ撒布スヘシ

サルムシ
テンノコ

かぶらば
ち

菜ノ鋸蜂、
ナノクロム
シ、ビクニ
(幼蟲)

種^{たね}

大根ノ蛆、
ダイコンバ
イ

大根、
蕪菁、
菜類、

瓜類、
玉葱、
大根、
蕪菁、
落花生

頃茄子等ニ發生甚シク被害劇甚ナル
モノアリ

黄赤色小形ノ蜂ニシテ年二回發生シ
老熟セル幼蟲ニテ土中ニ越年ス四五
月頃羽化シ出テ十字科植物ノ組織内
ニ點々産卵ス幼蟲ハ甚シク葉ヲ喰害
シ老熟スレハ土中ニ蛹化シ九月下旬
第二回ノ成蟲羽化シ秋蒔作物ニ産卵
シ特ニ此期ノモノモ被害多シ

小形ノ蠅ニシテ年數同ノ發生ヲ營ミ
蛹態ニテ土中ニ越年ス三四月頃ヨリ
出テ、土中ニ産卵ス幼蟲ハ播下シタ
ル種子又ハ萌芽ニ喰入シテ枯死セシ
ム老熟セルモノハ種子中又ハ土中ニ
蛹化シ一週間乃至九日間ニシテ羽化
シ再ヒ産卵ス人糞尿其他臭氣強キ肥

幼弱ナル時除蟲菊石鹼合劑ヲ撒布ス
ヘシ

除蟲菊木灰ヲ撒布スヘシ

除蟲菊加用石油乳劑ヲ撒布スヘシ

落下性ヲ利用シ拂ヒ落シ殺スヘシ

被害地ニハ可成臭氣アル肥料ヲ避ク
ヘシ

苗床ハ播種二週間前ニ二硫化炭素ヲ

注入シテ殺蟲シタル後播種スヘシ

播種後乾砂ヲ多量ニ撒布シ置クヘシ

播種ノ際臭キ肥料ヲ用ユル時ハ石油

口、病害

あぶら 蛭 蟲 アリマキ、 アブラ、コ メ	葱ノむく げむし ネギノアザ ミウマ、ス リツプス	蔬菜類 一般	葱、玉	種類多キモ蔬菜類ニ寄生スルモノハ 普通幼蟲態ニテ越年シ翌春ヨリ各種 ノ蔬菜ニ集マリ加害スルコト多シ	經過未タ詳ナラサルモ年數同ノ發生 ヲ營ムモノ、如シ幼蟲成蟲共ニ葱、 玉葱等ノ葉緣部ニ集マリ口吻ヲ以テ 皮ノ組織内ニ孔ヲ穿チ養液ヲ吸收ス 加害部ハ白斑ヲ現シ甚シキ時ハ全ク 白色ニスルコトアリ	石鹼液除蟲菊石鹼液又ハ六液ヲ撒布 スヘシ 石油乳劑二三十倍液除蟲菊石油乳劑 四五十倍液ヲ灌注スヘシ	除蟲菊加用石油乳劑二三十倍液若ク ハ除蟲菊石鹼液ヲ灌注スヘシ 熱湯ヲ撒布スヘシ	料ヲ施ストキハ從テ多數ノ成蟲集リ 被害多シ チ少シク注加シテ施スヘシ
--	--	-------------------	------------	--	---	--	--	---

瓜類ノ
露菌病

本病ハ瓜類ノ葉ニ發生スル病害ニシテ葉上
多角形淡黃色病斑ヲ現ハスコノ病害ハ下葉
ヨリ順次上葉ニ及ブテ常トス
ペロノプラスモパラ、キユーベンシス菌ノ
寄生ニヨル
陰濕ナル氣候ノ土地又ハ多肥ナル時ニ多ク
發ス

葉ノ二三葉開展セル頃ヨリ三斗式石灰ホル
ドゥ液ヲ撒布スヘシ
數蘖チナスヘシ
垣作トナスヘシ

瓜類ノ
炭疽病

本病害ハ前種ニ酷似スレトモ病斑ハ黑褐色
重輪狀チナス葉、蔓、幼果等ニモ發病ス
コルレトトリクム、ラゲナリユーム菌ノ寄
生ニ依ル
同前

同 前

茄立枯
病

茄苗ノ苗床ヨリ地際細リテ斃レ又本畑ニ移
植シタル後モ根際細クナリテ遂ニ枯死スル
ニ至ル所ノモノナリ
ネクトリア、イボメー菌ノ寄生ニ寄ル

鮮黃色ナル種子ヲ播下スヘシ
前年ノ畑ニ連作セサル様ニスヘシ
苗床肥料ニハ木灰チ加用スヘシ

なすあながれ
茄青枯
びやう
病

かぼちやの
南瓜ノ
しろきぬびやう
白絹病

室素質肥料ヲ多ク施シタルモノ又ハ連作地ニ發生ス

茄、馬鈴薯ノ一枝若シクハ一株又ハ一葉俄カニ水分ヲ失ヒタルカコトクナリテ萎凋シ次第ニ全體枯死スルニ至ル所ノモノナリ
バチルス、ソラナシアルムト稱スル細菌ノ寄生ニ依ル
排水不良ナル土地ニ室素質肥料ヲ多ク用ヒタルモノニ多シ

此ノ病害ハ蔓ノ地際及ヒ南瓜ノ地面ニ接スル所ニ白色ノ絹絲様ノモノヲ附著蔓延シ後ニ其ノ部ハ腐敗スルニ至ル
本病ハヒポクヌス、キユキユメリス菌ノ寄生ニ依ル

本病ハ冬季及ビ秋期葉ノ尖端及ヒ或ル部分

移植ノ際モ根元ニ木灰ヲ盛り置クヘシ

移植地ハ可成土地ノ排水ヲ計ルヘシ

肥料ノ配合ニ注意スヘシ

移植後根元ニ木灰ヲ盛り置クヘシ

發生ノ恐レアル地ニ移植セントスル時ハ其

個所丈ケフオルマリソ溶液ヲ以テ消毒スヘシ

シ

根際ニハ木灰ヲ盛り置クヘシ

南瓜ノ地面ニ接スル所ハ敷藁ヲナシ置クヘシ

シ

ねぎのつゆ
葱ノ露
かびびやう
菌病

七〇

ニ淡黄色ノ病斑ヲ生シ其ノ部ハ後ニ灰白色
又ハ煤色ノ黴ヲ生ス葉ハ遂ニ黄褐色ニ乾燥
枯死ス

ペロノスポーラ、シユライデニー菌ノ寄生
ニ依ル

温暖ニシテ多濕ナル氣候ニ發病ス

此外種々ノ病害アレトモ茲ニ略ス

苗床ヨリ二斗五升式石灰ホルドウ液ヲ數回
撒布スヘシ
本畑ニ於テ數回三斗式石灰ホルドウ液ヲ撒
布スヘシ

第四、主ナル殺蟲殺菌劑

一、驅蟲劑

名	稱	一調合量	調	製	法	注	意
						石鹼ハ上等ノ洗濯石鹼ヲ用ヒ決シテ 不良品ヲ用フヘカラス（浮石鹼ハ概 ネ可ナリ） 鹽氣アル器具又ハ水ハ使用スヘカラ	

石油乳劑

石油一升
石鹼十二匁
水五合

先ツ石油空罐ノ上部ヲ切り取りタルス
モノ二個ヲ用意シ一個ニハ水五合ヲ
入レ之レニ薄ク削リタル石鹼ヲ投シ
煮沸溶解セシメ他ノ一個ニハ石油ヲ
入レ危險無キ様炭火ニテ加熱シ後双
方ヲ混合シ液ノ冷却セサル中ニ手早
ク「ポンプ」ヲ以テ劇シク液ヲ混交シ
牛乳様トナリ稍々粘氣ヲ帶フルニ至
リテ止ム

適用害蟲及稀釋量

介殼蟲 冬期ハ 五—七倍
夏期ハ 一〇—一五倍

蚜蟲類 一五—二五倍

食葉甲蟲其他ノ幼蟲 一〇—二〇倍

使用上ノ注意

乳劑ヲ稀釋スルニハ最初三倍位ノ湯
ヲ以テ「ポンプ」ニテ十分混交シ後適

當ノ水ヲ入ルヘシ

石油ノ分離セル不完全ノモノハ使用

スヘカラス

撒布ハ晴天無風ノ日ヲ可トス

調製及使用上ノ注意ハ前記石油乳劑

ニ同シ

適用害蟲及稀釋量

介殼蟲 二〇—三〇倍

除蟲菊加
用石油乳
劑

石油一升
除蟲菊粉二十匁
石鹼二十匁

豫メ除蟲菊ノ粉二十匁ヲ石油一升ニ
混シ一晝夜乃至二晝夜間密閉シテ時
々振盪ス之レヲ濾過スル時ハ淡黃色

十二匁 水 五合

ノ石油ヲ得ヘシ之レヲ以テ前記石油乳劑ト同様ノ方法ニテ調製スヘシ

蚜蟲類 四〇—六〇倍
椿 象 二〇—三〇倍
甲蟲其他ノ幼蟲 二〇—四〇倍

石鹼液

石鹼 二〇—三〇匁 水 一斗

所要ノ石鹼ヲ薄ク削リ之レニ三升計リノ水ヲ入レ煮沸溶解セシメ後水ヲ加ヘテ全量一斗トナス又一時ニ多量ヲ要スル場合ハ大釜ヲ用ヒ一斗ノ水ニ對シ四百匁乃至六百匁ヲ煮沸溶解セシメ使用ニ際シ適宜稀釋スヘシ

石鹼ハ普通洗濯石鹼ニテ可ナリ
適用害虫
蚜蟲類、赤壁蝨、むくけむし、蟬、蚱蜢、尺蠖ノ幼弱ナルモノ
本劑ハ蟲體ニ觸ルル様丁寧ニ撒布スヘシ
晴天日中ニ撒布スルヲ可トス
本劑ハ液ノ冷却シテ粘氣ヲ増シタルモノヲ使用スヘシ

除蟲菊石

除蟲菊粉 一〇—二〇匁

石鹼ヲ薄ク削リテ二升内外ノ水ニテ煮沸溶解セシメ火ヲ引キタル後之レニ除蟲菊粉ヲ加ヘテ能ク攪拌シ其儘

藥劑ノ分量ハ蟲ノ強弱ニヨリ多少加減スヘシ
石鹼ハ可成上質ノモノヲ可トス
使用上ノ注意ハ石鹼液ニ準ス

鹼液

六

液

石鹼 二〇—三 〇— 水 一斗	除蟲菊粉 八—一〇 勺	石油 五勺	石鹼 一〇 五合	水 一斗
一晝夜間密閉シ置キ使用ノ際除蟲菊粉ノ混在ノマ、撒布ス	豫メ石油ニ除蟲菊粉ヲ投入攪拌シテ一晝夜間密閉シ置キ調製ノ際ハ石鹼ヲ削リテ鍋又ハ石油空罐等ニテ煮沸溶解セシメ後之レニ右ノ除蟲菊浸出石油(濾過セス)ヲ加ヘ石油乳劑調製法ニ準シ攪拌混合スレハ帶綠黃色ノ粘液ヲ得ベシ之レヲ原液トス 使用ノ際水ヲ加ヘ一斗内外トス			
適用害蟲 各種蚜蟲、蛄蝻、螟蛉、尺蠖、茶ノ浮塵子、甲蟲ノ幼蟲、スリツプス、赤ダニ等	本劑ハ除蟲菊石油乳劑ノ一種ニシテ製造簡易ニシテ石油ノ分離スル恐レナク植物ニ被害スルコトナシ 適用害蟲 蚜蟲、浮塵子、軍配蟲 一斗	稻青蟲 八升—一斗	茶蛄蝻、梅ケムシ、イラムシ 五—八升 四—五升	食葉甲蟲 適用害蟲 食葉甲蟲、螟蛉、尺蠖、蛄蝻、葉

除蟲菊木
灰合劑

除蟲菊 一匁
草木灰 一〇—二
〇匁

草木灰ヲ細目ノ篩ニテ篩ヒ之レニ除蟲菊粉ヲ加ヘ再ヒ篩ニテ能ク混和セシメ一晝夜間密閉シ置クヘシ

蜂、根切蟲、夜盜蟲等

本劑ハ多ク蔬菜類ノ害蟲驅除ニ使用シテ効果アリ

朝露ノ乾カサル前葉上ニ撒布スヘシ本劑ハ使用ノ際効アルノミナラス豫防劑トシテ効多キモノナリ

根切蟲、夜盜蟲ニ對シテハ根際ニ徑五寸位ノ圓形ニ撒布スヘシ

本劑ハボーメー比重四度—四度半ニ出來上リタルチ可トス

本劑ハ冬期サンホゼー介殼蟲其他落葉果樹介殼蟲ニ使用シテ效果多シ

春期發芽前柑橘其他ノ赤壁蟲驅除ニ使用スル場合ニハボーメー〇・五度

(七八倍液)ニ稀釋スヘシ

本劑ハ眼ニ觸ル、トキハ甚シク痛チ感スルチ以テ「ヘチマ」チ薄ク切リテ

普通石灰
硫黃合劑

生石灰 一〇〇匁
硫黃華 一〇〇匁

釜又ハ石油罐ノ上部チ切りタルモノヲ用意シ最初之レニ硫黃華ヲ入レ少計ノ水ヲ加ヘテ能ク濕シ次ニ生石灰ヲ投シ風化セシメ之レニ三升斗リノ湯又ハ水ヲ加ヘテ攪拌シツ、煮沸セシムヘシ煮沸四十分乃至一時間位ニシテ液ハ赭色トナリ硫黃華ノ全ク溶解シテ上面ニ浮ハサルニ至リテ止メ

濃厚石灰
硫黃合劑

水 一斗	生石灰 六〇〇 硫黃 一斗	水 一斗
之レニ熱湯ヲ加ヘテ全量一斗トナス ヘシ若シ熱湯ヲ用意スルノ繁雜ヲ感 スル場合ハ液ノ冷却後水ヲ以テ全量 一斗トナスモ可ナリ	最初一斗二升位ノ湯又ハ水ヲ用ヒ大 釜ニテ前記普通石灰硫黃合劑調製法 ト同様ニ處理シテ原液一斗ニ至ル迄 煮詰ムベシ普通沸騰後一時間餘ニシ テ出來上ルベシ 通常ボーメー比重二十八度—三十度 ヲ示ス	水 一斗
眼鏡ヲ作り眼部ヲ覆フハシ 本劑ハ皮膚及衣服ニ觸レシムヘカラ ス 藥劑使用後ハ直チニ噴霧器ヲ丁寧ニ 掃除シ置クヘシ	硫黃華ノ變リニ硫黃粉ヲ用フルモ妨 ケナシ 本劑ハ農閑ヲ利用シテ調製シ貯藏ス ルニ便利トス 共同調製ヲナスチ利益トス 本劑ヲ使用スル場合ニハボーメー比 重計ニテ濃度ヲ檢シ適宜稀釋シテ用 フベシ 本劑ハ現時廣ク販賣セラレ濃度一定 ニシテ使用簡易且ツ價格比較的低廉 ナルヲ以テ一般ニ需用多シ	水 一斗

販賣石灰
硫黃合劑

曹達硫黃
合劑

硫黃華 五〇〇 苛性曹達 二五〇 水 一斗

本劑ハ濃厚(強度)石灰硫黃合劑ニシテ濃度ハボーメー比重三十三度アルヲ普通トス
生石灰及硫黃ヲ用ヒ蒸氣力又ハ強力ナル火力ヲ用ヒ製造セルモノナリ

適用害虫

茶樹柑橘ノ赤ダニ

二三月頃 ボーメー

一度(四〇—五〇倍)

夏 期 同

〇、五度(八〇—一〇〇倍)

梨、桃其他ノ落葉果樹ノ介殼蟲

二三月頃 ボーメー

四、四五度(八—一〇倍)

硫黃華ヲ泥狀ニ濕シ水三升ヲ加ヘ之ニ苛性曹達ヲ投入シテ煮沸溶解セシメタル後湯ヲ加ヘテ全量ヲ一斗トナシ更ニ十分以上煮沸スベシ

柑橘其他ノ赤壁蟲ニ對シ四〇—六〇倍ニ稀釋シテ使用スベシ
夏期ハ幼芽ヲ害スルコトアリ注意スベシ

豫メ松脂ハ粉碎シ苛性曹達ハ小塊ニ碎キ置キ右一劑ニ對シ熱湯一升ノ割合ヲ以テ鐵葉罐又ハ樽ニ入レ之レニ

松脂ハ不純物ナク且ツ乾燥セルモノヲ撰ヒ苛性曹達ハ工業用ニシテ強度ナルモノヲ用フ

松脂合劑
第一法

松脂 七五
苛性曹達 四五
水 一斗

苛性曹達ヲ投入スル時ハ曹達ハ熱チ發シテ溶解シ初ム此ノ際松脂ヲ入レ徐々ニ攪拌スルコト暫時ニシテ液ハ暗赤色トナリ松脂及ヒ苛性曹達ハ全ク溶解ス可シ之レニ水ヲ加ヘ全量一斗トス

撒布ノ際ハ可成皮膚又ハ衣服等ニ觸レサル様注意スベシ
適用害蟲
柑橘介殼蟲、姫粉蟲
二三月頃 一斗液撒布
夏期ハ倍量ニシテ撒布

松脂合劑
第二法

松脂 一〇〇
苛性曹達 六〇
水 一升

前者ト同様ニ處理ス一時ニ多量ノ原液ヲ造リ使用ノ際適宜稀釋スベシ

原料其他ノ注意ハ前者ニ準ズ
るびー蠟蟲其他ノ介殼蟲驅除トシテ
夏期七月下旬―八月上旬ニ二十倍ニ
稀釋シテ用フ

つ
の
ま
た
液

つ
の
ま
た
一〇〇
水 三斗

先ツつのもたチ五升位ノ水ニテ徐々ニ煮沸溶解セシメ之ヲ濾過シテ全量三斗トナス

赤壁蝨ノ驅除ニ用ヒ效果多シ
撒布ハ晴天日中ニ行フヘシ
強力噴霧器ニテ蟲體ニ接スル様丁寧ニ撒布スヘシ

青酸瓦

藥劑名	分量及ヒ時間	燻 蒸 方 法	注 意
内容立方積一 千立方尺ニ付 青酸加里 二百五十瓦 乃至三百瓦 硫酸 二百五十 乃至三百 cc	樹ノ大小ニ應ン先ツ適當ノ燻蒸覆ヲ 覆ヒ周圍ノ裾ヲ密閉シ内容立方積ヲ 測リ而シテ是レニ應スル藥品即チ青 酸加里ヲ紙ニ包ミテ秤リ次ニ水ヲ量 リテ瓦斯發生器ニ入レ之レニ硫酸ヲ	燻蒸前器具ノ注意 一、適當ナル布又ハ紙ノ燻蒸覆若干 一、砂囊 若干 一、瓦斯發生器（瀬戸焼）竝蓋 若干 一、液量計 一個 一、バケツ竝ニ柄杓 一個ツ、 一、グラム秤 一個 一、日除幕（布製燻蒸覆ノトキ用ユ） 若干 一、尺度竿 一本 燻蒸施行上ノ注意 一、青酸加里ハ劇毒ナルモノナレハ 取扱上注意シ必ス「ビンセツト」 又ハ匙ニテ取扱フコト 一、青酸加里ハ決シテ空氣中ニ放置 セサルコト 一、硫酸ハ劇藥ナレハ身體衣服等ニ	

斯燻蒸

水	七百五十 cc
乃至一時間	四十五分
以上冬期介	殼蟲
青酸加里	二百瓦
硫酸	二百 cc
水	六百 cc
時間十分乃至二十分	以上夏期介
殼蟲	綿蟲

注加シ此器ヲ覆内ニ入レ置キ前ニ秤
 リ置キタル青酸加里ヲ投入シテ蓋ヲ
 ナシ直チニ覆ノ裾ヲ密閉シ瓦斯ノ漏
 出ヲ防キ置キ已定ノ時間ヲ經過セハ
 裾ノ重リヲ取除キテ瓦斯ヲ吸入セヌ
 樣覆ヲ取除クヘシ
 苗木ノ燻蒸ハ多ク燻蒸室又ハ燻蒸箱
 ナ用ヒテ行フノ方法アレトモ茲ニ略
 ス

- 附著セシメサルコト若シ誤ツテ
 觸レタル場合ニハ直チニ水ニテ
 洗フコト
- 一、硫酸ト水ト混スル際ハ必ス水ノ内ニ硫酸ヲ徐々ニ注加スルコト
 - 一、燻蒸ノ際ハ瓦斯ノ漏泄ニ留意シ係員ノ外接近セサルコト
 - 一、一燻蒸ヲ終リタル後ハ其殘液ハ危険ノ恐レナキ所ニ穴ヲ掘リテ埋ムルコト
 - 一、濕潤ナル植物ハ燻蒸スヘカラス
 - 一、瓦斯發生器ニ青酸加里ヲ投入スレハ直チニ蓋ヲナスコト
 - 一、瓦斯發生器ハ覆ニ接近セシメサルコト
 - 一、内容立方積ノ測定ヲ誤ラサルコト
 - 一、青酸加里硫酸ハ貯藏ニ留意スル

二硫化

内容積一千立
方尺ニ付
二硫化炭素四
乃至五封度

本法ハ貯藏穀物ノ害蟲驅除ニ最モ有
効ナルモノニシテ少量ノモノニ對シ
テハ箱ヲ用ヒ多量ノ燻蒸ヲ施行スル
場合ニハ倉庫内ニテ行フモノトス此
方法ヲ施行スルニハ豫メ倉庫内ヲ檢
シ天井、床、四壁等ノ間隙ハ厚紙ヲ
以テ目張りヲナシ窓ハ閉シテ周圍ニ

コト

一、覆ノ取除ノ際ハ必ス風上ニテナ
シ毒瓦斯ヲ吸入セサルコト

一、定植シアル小樹ハ燻蒸籠ヲ作り
テ行フコト

一、大ナル樹モ成ルヘク枝ヲ緊束シ
テ覆ヲ用フルコト

一、布製ノ燻蒸覆ヲ用ユル際ハ日除
幕ヲ用ユヘシ

一、二硫化炭素及其瓦斯ハ極メテ有毒
ナレバ取扱上特ニ注意スルコト

一、二硫化炭素及其瓦斯ハ發火爆發
シ易キモノナレハ使用中ハ決シ
テ火氣ヲ近ケザル様注意スルコ
ト

一、二硫化炭素ハ注毒發火等ノ虞アレハ
使用ノ都度購入スルコト若

炭素燻

燻蒸時間
三十六時間
乃至四十八時間

粘土ヲ塗り又厚ク目張ヲナスヘシ而シテ燻蒸スヘキ米穀ハ内部ニ堆積シ最上部ニ金盥又ハ陶器皿ヲ所々ニ配置シ之レニ半封度又ハ一封度位宛ニ硫化炭素ヲ分注シ手早ク倉庫外ニ出テ後出入口ヲ密閉シ嚴ニ目張りヲナシ所定ノ時間ヲ經タル時ハ一齊ニ各窓及出入口ヲ開放シテ瓦斯ヲ放散セシムヘシ

シ残りタルモノハ寒冷ナル密室中ニ嚴封シテ貯藏スルコト
一、燻蒸施行ノ倉庫内ニ衣類等アルモ變色ノ恐ナシ
一、本法ヲ行フニハ害蟲活動初期即チ五六月ヲ最モ適當トス
一、燻蒸ノ際倉庫内暗黒ニシテ作業ニ不便ナル時ハ懷中電燈ヲ用ヒ提灯其他ノ燈火ハ決シテ用フヘカラス

二、殺菌劑

藥劑名 一分 量

調

製

法

注

意

硫酸銅

一個ノ大桶(四斗樽ノ如キモノ)竝ニ二個ノ小桶(二斗入ノ水桶ノ如キモノ)ヲ用意シ一ツノ小桶ニ熱湯二三升ヲ入レ之レニ細碎セル硫酸銅ヲ布

硫酸銅ハ金物ノ器ニテ溶解スヘカラス
生石灰ノ品質ノ良好ナルモノヲ撰フヘシ

石灰
ボ
ル
ド
ウ
液曹達
ボ
ル
ド
ウ
液

百二十 斗	生石灰 六十 斗	六十 斗	水 二斗 五升	乃至 四斗	硫酸 銅 百 斗	炭酸 曹達 百 斗	水 二斗 乃 至 三斗
----------	----------------	---------	---------------	----------	-------------------	--------------------	-------------------------

ニ包ミテ吊シ置キ硫酸銅ノ溶解シタル後水ヲ加ヘテ調製セントスル全量ノ半量マテトナシ他ノ小桶ニ生石灰ヲ入レ少量ノ熱湯ヲ徐々ニ滴下シ消化セシメツ、能ク攪拌シ水ヲ加ヘテ全量ノ半量トナシ兩者ヲ同時ニ大桶中ニ注加シ攪拌スルトキハ青綠色ノ液トナル是レ即チ石灰ホルドウ液ナリ

製法前者ニ同シ

兩液混合ノ後ハ水ヲ加フヘカラス製造後數時間經過セハ効力減スルヲ以テ成ルヘク早ク撒布スヘシ本劑ハ豫防液ナルヲ以テ發病前ヲ見計ツテ撒布スヘシ葉ノ滿面ニ撒布スヘシ撒布ハ晴天無風ノ日ヲ撰フヘシ本劑ハ空氣傳染ニヨリテ起ル病菌ノ豫防ニ用ユヘシ

前 同
本劑ハ汚染ヲ忌ム作物ニ撒布スヘシ

硫酸銅液

砂糖ボルドー液

硫酸銅 六匁乃至 十匁	硫酸銅 四倍乃至 六倍	水 一斗	硫酸銅 百二十匁	生石灰 六十匁乃至 一百匁	砂糖 至百匁乃至 二百匁	但シ黑砂 糖ナレバ 半量
細切セル石鹼ニ二三升ノ水ヲ加ヘ石 油空罐ニテ攪拌シナガラ充分加熱溶 解ス	一方細碎セル硫酸銅ヲ二三升ノ熱湯 ニテ溶解シ之ヲ前記石鹼溶液中ニ攪 拌シナガラ徐々ニ注加スル時ハ乳青 色ノ乳狀體ヲ得	使用ニ當リ更ニ殘量ノ水ヲ加フ	本劑ヲ作ルニハ水ヲ三分シ各三者テ 溶解シ先ツ石灰ボルドー液ヲ作り是 レニ砂糖ヲ解キタル液ヲ注加シテ能 ク攪拌スヘシ	同 前	本劑ハ成ルヘク永ク葉上ニ殘留セシ ムルノ必要アル時ユヘシ	又附着シ難キ葉上ニ撒布スヘシ

水 二斗乃至
四斗

フォルマ

フォルマ
リン液

リン
一ポンド

所要ノ水ノ内ニフォルマリ
ンテ混合
スヘシ

水 五升乃至
七升

多ク土中ノ害菌ヲ燻殺スルニ用ユ此
液ハ播種又ハ移植二週間前土中ニ撒
布シ一晝夜蒔チ掩ヒ置キ後土ヲ攪拌
シ置クヘシ

第五、益 蟲

べたりあ瓢蟲

べたりや瓢蟲ハ朱赤色ニシテ五個ノ黑色斑點ヲ有スル可憐ナル小甲蟲ニシテ幼蟲成蟲共ニいぜ
りや介殼蟲ヲ好シテ捕食ス故ニ本蟲ハいせりや介殼蟲發生地ニ應用シテ其効果極メテ顯著ナリ
べだりや瓢蟲ノ配付及注意

本場ニ於テハベたりや瓢蟲ヲ飼育シ希望ニ應シ又必要ト認メタル箇所ニ隨時配付シテ應用ニ勉メツ、アリ希望者ハ左記ノ注意ニ基キ配付ヲ受クヘシ

一、本場飼育ノベたりや瓢蟲ハ縣内ハ勿論縣外ニモ之レヲ配付スヘシ

二、希望者ハいぜりや介殼蟲發生ノ狀況及發生地反別ヲ附記シテ本場ニ申込ムヘシ

一、配付ヲ請ケタルモノハ左記事項ヲ報告スヘシ

到著月日、到著蟲數、動靜其他參考トナルヘキ事項

一、本場ハ請求ナクトモ必要ニ應シ便宜放飼スルコトアルヘシ

第六、野 鼠

縣下ノ地方ニヨリ農作物ハ野鼠ノ爲メ年々歲々害テ被ムルコト多キヲ以テ是等ノ地方ニ於テ本場
カ年来培養配付ナシツ、アル處ノ野鼠窒扶斯菌ノ配付ヲ得テ驅除ヲ行フ事肝要ナルヲ以テ左ニ配
付規定ヲ掲ク

静岡縣立農事試驗場野鼠チブス菌配付規定

一、野鼠チブス菌ハ郡市町村ノ團體ニ於テ野鼠ヲ驅除セントスル場合ニ限り之ヲ配付ス

一、野鼠チブス菌ノ配付ヲ受ケントスルモノハ郡市役所又ハ郡市農會ヲ經テ施行期日三週間前

ニ左記書式ニヨリテ本場宛ニ願出スヘシ

野鼠チブス菌配付願

今般何郡何村ニ於テ野鼠驅除施行致度候ニ付チブス菌御配付相成度此段御願申上候也

但 一、被害反別

一、作物種類

一、驅除施行豫定月日

一、野鼠チブス菌送付個所

年 月 日

何々團體印

静岡縣立農事試驗場長

何 某 殿

一、野鼠チブス菌配付期日ハ毎年十二月ヨリ翌年三月迄トス

一、野鼠チブス菌配付ハ無償トス但シ送費及容器返却等ニ要スル費用ハ請求者ノ負擔トス

一、野鼠チブス菌使用ノ場合ハ總テ本場ノ指揮ヲ受クヘシ

一、野鼠チブス菌ノ配付ヲ受ケタル時ハ使用後二ヶ月以内ニ其狀況ヲ本試驗場長ニ報告スヘシ

一、野鼠チブス菌ハ人家密接シタル地域又ハ飲料水使用水ノ水源ニ近接シタル地域ニ配付スル

コトヲ得ス

一、配付ノ地域及其日時ハ二週間前ニ於テ所轄警察官署ニ通告スルコト

野鼠チブス菌使用注意書

一、團子調製法

先ツ試験管十本ノ内容物ヲ捏ネ鉢ヘ振出シ殺菌水五合ニ溶解セシメ後蕎麥粉約二升ヲ投シ

町嚀ニ攪拌混和セハ一種ノ練團子ヲ得ヘシ

一、團子調製ト分量

(イ) 試験管培養ノチブス菌ヲ使用スル場合 (三町歩宛)

一、寒天斜面培養 一〇本

一、蕎麥粉 二升 (蕎麥粉一升五合ニ糠五合ヲ加フルモ宜シ)

一、殺菌水 五合 (清水ヲ沸騰シ冷却セルモノ)

(ロ) 液體培養ノチブス菌ヲ使用スル場合 (十町歩宛)

一、液體培養 ビール瓶一本

一、蕎麥粉 六升乃至八升

一、殺菌水 一升乃至二升

一、實施

斯クシテ製シタル練團子ヲ握飯大ノ團子トナシ新聞紙ニ包ミ人夫ニ各一個ツツ所持セシメ
一二間ノ間隔ヲオキ整列前進シツ、鼻穴ヲ搜索シテ之レヲ更ニ拇指頭大ノ小團子トナシ穴
ニ投入スヘシ

一、注意

一、此菌ヲ使用スル場合ニハ成ルヘク一方ヨリ鼠穴ヲ見落サザル様配置スルコト

一、驅除人夫ハ十人乃至二十人位ヲ一組トナシ指揮者ノ下ニ互ニ共同一致シテ之レニ從事スルコト

一、チブス團子ハ日光風雨ニ晒ササル様使用ノ際ハ新聞紙ニテ包ムコト

一、團子ハ製造當日中ニ全部使用ノ計畫ニテ調製スルコト

一、驅除實施當日前後ハ兩三日間中耕等ヲ行ハサルコト

一、蕎麥粉ハナルヘク新鮮ナルモノヲ使用スルコト

一、此菌ハ多少人體ニ中毒性ヲ有スルモノナレハ使用ノ際ハ十分ナル注意ヲ要ス故ニ消化器等ニ異常アルモノ又ハ老人、小兒等ハ驅除ニ從事セシメサルヲ安全トス

一、驅除施行中ハ食事及ヒ喫煙等總テ口邊ニ手指ヲ觸レサル様注意スルコト

一、團子使用後ハ必ス石炭酸四五十倍液又ハアルボース石鹼等ニテ手指先キヲ清洗スルコト

一、團子製造ニ用ヒシ器具ハ熱湯ニテ十分消毒スルコト
以上

附 錄

濃厚石灰硫黃合劑稀釋倍數表

原液ノ比重		ポリメー○・五 度半ニスル場合		ポリメー○・三 度半ニスル場合	
三十四度	三十三度	三十二度	三十一度	三十度	二十九度
八・六	八・二	七・八	七・五	七・一	六・八
一・一・四	一・〇・九	一・〇・五	九・九	九・五	九・一
四三・〇	四一・四	三九・七	三六・一	三五・五	三四・八
八七・〇	八四・〇	八一・〇	七七・〇	七四・〇	七一・〇
一四七・〇	一四二・〇	一三七・〇	一三一・〇	一二九・〇	一二〇・〇
二十七度	二十五度	二十三度	二十度	十八度	十七度
六・五	五・五	四・五	四・〇	三・八	三・七
八・三	七・四	六・五	五・五	四・五	四・〇
三一・九	二九・〇	二四・七	二二・〇	一七・〇	一五・〇
六八・〇	六五・〇	五九・〇	五三・〇	四五・一	三九・〇
一一〇・〇	一一〇・〇	一〇一・〇	九一・〇	七七・〇	六七・〇
二十九度	二十八度	二十七度	二十六度	二十五度	二十四度
六・八	六・五	六・一	五・五	四・五	四・〇
九・一	八・七	八・三	七・四	六・五	五・五
三四・八	三三・三	三一・九	二九・〇	二四・七	二二・〇
七一・〇	六八・〇	六五・〇	五九・〇	五三・〇	四五・一
一二〇・〇	一一六・〇	一一〇・〇	一〇一・〇	九一・〇	七七・〇
三十一度	三十度	二十九度	二十八度	二十七度	二十六度
七・五	七・一	六・八	六・五	六・一	五・五
九・九	九・五	九・一	八・七	八・三	七・四
三六・一	三五・五	三四・八	三三・三	三一・九	二九・〇
七七・〇	七四・〇	七一・〇	六八・〇	六五・〇	五九・〇
一三一・〇	一二九・〇	一二〇・〇	一一六・〇	一一〇・〇	一〇一・〇
三十二度	三十一度	三十度	二十九度	二十八度	二十七度
七・八	七・五	七・一	六・八	六・五	六・一
一・〇・五	一・〇・九	一・一・四	四三・〇	四一・四	三九・七
八一・〇	七七・〇	七四・〇	七一・〇	六八・〇	六五・〇
一三七・〇	一三一・〇	一二九・〇	一二〇・〇	一一六・〇	一一〇・〇
三十三度	三十二度	三十一度	三十度	二十九度	二十八度
八・二	七・八	七・五	七・一	六・八	六・五
一・〇・九	一・〇・五	一・〇・九	一・一・四	四三・〇	四一・四
八四・〇	八一・〇	七七・〇	七四・〇	七一・〇	六八・〇
一四二・〇	一三七・〇	一三一・〇	一二九・〇	一二〇・〇	一一六・〇
三十四度	三十三度	三十二度	三十一度	三十度	二十九度
八・六	八・二	七・八	七・五	七・一	六・八
一・一・四	一・〇・九	一・〇・五	九・九	九・五	九・一
四三・〇	四一・四	三九・七	三六・一	三五・五	三四・八
八七・〇	八四・〇	八一・〇	七七・〇	七四・〇	七一・〇
一四七・〇	一四二・〇	一三七・〇	一三一・〇	一二九・〇	一二〇・〇

青酸瓦斯燻蒸藥量表

(一瓦以下ハ四捨五入トス)

數字ハ稀釋倍數ヲ示ス

三三 四四 五 六 八 十 十 十
度 度 一 四

度 半 度 半 度 度 度 度 度

| | | | | | | 一・三 一・六 二・〇

| | | | | | | 一・四 一・九 二・三 三・〇

二・〇 二・六 三・一 三・六 四・一 五・二 七・四 九・七 一〇・一 一二・五

五・一 六・一 七・二 八・二 九・三 一一・八 一五・二 二〇・四 二二・七 二九・〇 九〇

九・二 一〇・九 一二・六 一五・四 一六・二 一九・八 二七・二 三一・七 三八・六 五〇・〇

藥 品 量		内容積 (立方尺)
五〇	一〇	一五〇
一〇	二〇	二五〇
二〇	三〇	三五〇
三〇	四〇	四〇〇
四〇	五〇	四五〇
五〇	六〇	五〇〇
六〇	七〇	五五〇
七〇	八〇	六〇〇
八〇	九〇	六五〇
九〇	一〇〇	七〇〇
一〇〇	一一〇	七五〇
一一〇	一二〇	八〇〇
一二〇	一三〇	八五〇
一三〇	一四〇	九〇〇
一四〇	一五〇	九五〇
一五〇	一六〇	一〇〇〇
一六〇	一七〇	一〇五〇
一七〇	一八〇	一〇〇〇
一八〇	一九〇	一〇五〇
一九〇	二〇〇	一〇〇〇
二〇〇	二一〇	一〇五〇
二一〇	二二〇	一〇〇〇
二二〇	二三〇	一〇五〇
二三〇	二四〇	一〇〇〇
二四〇	二五〇	一〇五〇
二五〇	二六〇	一〇〇〇
二六〇	二七〇	一〇五〇
二七〇	二八〇	一〇〇〇
二八〇	二九〇	一〇五〇
二九〇	三〇〇	一〇〇〇
三〇〇	三一〇	一〇五〇
三一〇	三二〇	一〇〇〇
三二〇	三三〇	一〇五〇
三三〇	三四〇	一〇〇〇
三四〇	三五〇	一〇五〇
三五〇	三六〇	一〇〇〇
三六〇	三七〇	一〇五〇
三七〇	三八〇	一〇〇〇
三八〇	三九〇	一〇五〇
三九〇	四〇〇	一〇〇〇
四〇〇	四一〇	一〇五〇
四一〇	四二〇	一〇〇〇
四二〇	四三〇	一〇五〇
四三〇	四四〇	一〇〇〇
四四〇	四五〇	一〇五〇
四五〇	四六〇	一〇〇〇
四六〇	四七〇	一〇五〇
四七〇	四八〇	一〇〇〇
四八〇	四九〇	一〇五〇
四九〇	五〇〇	一〇〇〇
五〇〇	五一〇	一〇五〇
五一〇	五二〇	一〇〇〇
五二〇	五三〇	一〇五〇
五三〇	五四〇	一〇〇〇
五四〇	五五〇	一〇五〇
五五〇	五六〇	一〇〇〇
五六〇	五七〇	一〇五〇
五七〇	五八〇	一〇〇〇
五八〇	五九〇	一〇五〇
五九〇	六〇〇	一〇〇〇
六〇〇	六一〇	一〇五〇
六一〇	六二〇	一〇〇〇
六二〇	六三〇	一〇五〇
六三〇	六四〇	一〇〇〇
六四〇	六五〇	一〇五〇
六五〇	六六〇	一〇〇〇
六六〇	六七〇	一〇五〇
六七〇	六八〇	一〇〇〇
六八〇	六九〇	一〇五〇
六九〇	七〇〇	一〇〇〇
七〇〇	七一〇	一〇五〇
七一〇	七二〇	一〇〇〇
七二〇	七三〇	一〇五〇
七三〇	七四〇	一〇〇〇
七四〇	七五〇	一〇五〇
七五〇	七六〇	一〇〇〇
七六〇	七七〇	一〇五〇
七七〇	七八〇	一〇〇〇
七八〇	七九〇	一〇五〇
七九〇	八〇〇	一〇〇〇
八〇〇	八一〇	一〇五〇
八一〇	八二〇	一〇〇〇
八二〇	八三〇	一〇五〇
八三〇	八四〇	一〇〇〇
八四〇	八五〇	一〇五〇
八五〇	八六〇	一〇〇〇
八六〇	八七〇	一〇五〇
八七〇	八八〇	一〇〇〇
八八〇	八九〇	一〇五〇
八九〇	九〇〇	一〇〇〇
九〇〇	九一〇	一〇五〇
九一〇	九二〇	一〇〇〇
九二〇	九三〇	一〇五〇
九三〇	九四〇	一〇〇〇
九四〇	九五〇	一〇五〇
九五〇	九六〇	一〇〇〇
九六〇	九七〇	一〇五〇
九七〇	九八〇	一〇〇〇
九八〇	九九〇	一〇五〇
九九〇	一〇〇〇	一〇〇〇

一〇〇〇	七〇〇	七五〇	八〇〇	八五〇	九〇〇	九五〇	一〇〇〇
一三〇	一四〇	一五〇	一六〇	一七〇	一八〇	一九〇	二〇〇
三九〇	四二〇	四五〇	四八〇	五一〇	五四〇	五七〇	六〇〇
一六三	一七五	一八八	二〇〇	二一三	二二五	二三八	二五〇
四八九	五二五	五六四	六〇〇	六三九	六七五	七一四	七五〇

備考

一瓦ハ〇・二六七夕

一〇〇cc

ハ五・五四合

一合ハ一八〇cc

胃酸加里及硫酸ノ量ハ數字上同數ナレバ同行ニ表ハセリ

本表ハ代表數ヲ示セルノミナレドモ亦之レヲ加減スルトキハ如何ナル大數ニテモ小數ニ
 テモ直チニ知ルヲ得ベシ

大正十年三月十八日印刷
大正十年三月二十日發行

【非賣品】

靜岡縣立農事試驗場

安倍郡豐田村曲金

印刷者 馬場恒三

靜岡市横内町六十三番地

印刷所 馬場活版所

靜岡市横内町六十三番地

植物防疫資料館

C-522-5018

川瀬 譲

寄 贈

D

2-3

542